

## 見返り仏

## 若草田ひづる

伸ばし始めた。

前日からの断続的な強い雨で蒸し暑かった。薄明りの八畳一間で、たすき掛けをした井之嶋エツは、遺体である宇治山真美の顔にかぶせてある白い布をめくり、悲しみを堪えながらじっと見つめていた。

エツが遺体に向かって小さく語りかけた。少しうつむいたままの参列者はエツの方に耳を向けたが、降りしきる雨の音で、聞くことができなかった。

語りかけが終わると、エツは胸元から和紙に包まれた平たくて細長いものを取り出して畳の上に置き、ゆっくり開いた。参列者が固唾を呑んで、和紙の中を見ようとしている。黒い羽のカラツバが見えてくると、参列者全員が首を

カラツバ——カラスの翼から抜き取った初列の黒光りした風切羽である。鹿兒島県新富町の稲尾山系の麓にある

神沢集落の人たちは、水洗いした風切羽を天日干した後、和紙に包み、魔よけとして常にポケットに忍ばせていた。また故人の魂はカラツバによってこの世に未練を残さず、

永遠に成仏できると言われている。風切羽抜き処理が終わると、縄で足を縛られたカラスは、かかしの代わりとなる。またカラスから抜き取った血はミネラル分が豊富で、肥料として畑に散布される。

か確認すると、手を合わせた。

「最期の表情です。笑みを浮かんでいるのがわかりますか」

エツは参列者一人一人をのぞきこむように、話した。

遺族の一人が棺のなかをのぞいた。

「本当や。笑みを浮かべておる。見てみや。嘘じゃなかぞ」

辺りがざわめき始めた。遺体の口角が少し上がり、安らいだ表情が、微笑んでいるかのようにだった。

「真美さんは成仏されつつあります。みなさんに最期の挨拶をしているのです」

エツの一言に重みがあった。

参列者は、杯に盛られた芋焼酎を、遺体に少しずつかけていく。焼酎が遺体の顔にかかると、顔の薄化粧がとれ、くすんだ肌が見えてきた。

「真美ちゃんごめん。顔にかかったりして」

首から胸元にかけて杯を傾けていく。

墓地に掘られた穴は、前日から若い人らによってつくられたものだった。墓掘り役は力のある若い者のなかから選ばれる。朝から墓地に行つて酒を飲みながら土を掘っていく。

明け方まで降っていた雨で、土がぬかるんでいた。若い者によって棺が穴に埋められ、泥がかぶせられる。棺が見えなくなっていくと、号泣や涙を啜る音が聞こえ出した。「真美、許しておくれ」

カラツバが遺体の胸元に置かれた。エツが拝み始めると、参列者もいつせいに拝み始めた。エツはカラツバを使って遺体の頭から足先まで掃くように撫でた。祭壇の蠟燭の炎によって、エツの影が室内に大きく揺らぎ、線香の煙が四方八方になびいていく。遺体の両手は組まれたままで、指の間にカラツバがそつと挿し込まれた。

翌日、出棺の前に参列者が最期の別れを送る。遺体の口には紅がさされ、頬もほんのり赤く色づき、薄化粧が施され、ふつくらした顔つきが、死んだ人には見えなかった。雷を伴った雨はすっかり止んでいた。炊き出しの女性たちや近所の住民らも棺を見送った。歩いて十分程度の神沢墓地まで男どもが棺を担いでいくのだった。

真美の父親が遺影を持っている。エツは木彫りの笛を吹きながら、棺を担いでいる男たちの後ろを歩いていた。風を切るような澄んだ笛の音が、あたり一面にこだまする。男たちが裏山から切ってきた竹に布をつなぎ合わせた色旗を、遺族らが担ぐのだ。旗には『魂天逆戻地』と書かれてあり、稲尾山系からの吹き下ろす風が旗をなびかせていた。

苔の生えた古めかしい墓石がいくつも並んでいる場所に棺が置かれた。

エツは、カラツバが遺体の手にしつかり挿し込んである

真美の父親が、埋まった所に立って、唇を噛みしめた。「どうして真面目なあの娘がこんな姿になってしまったのか……」

「真美さんはきつとあの世で満足しおるとよ。エツさんに任しておればよか」

真美の親戚の一人が父親に話しかけた。

エツは杖をついたまま片手で祈り始めた。

大粒の汗がエツの額から頬を伝わっていく。参列者のなかには、ネクタイを緩め、額にハンカチを当てたり、空を見上げて目を細めたりしているものもいた。一匹の蟬が何かに追いかけられるように木と木との間を飛んでいく。その蟬に目を奪われるものもいた。そうやって三十分が過ぎた。

「エツさんもういいんじゃないの。いつもより長かよ。そげん立っておいたら足や腰に悪いじゃ」

参列者の一人がエツの背後から小さな声をかけてきた。

「いいんじゃない、若くして命を落とした彼女は今からいろんなことをやりたかったんじゃないかな。人生に後悔しておるよ。カラツバといっしょに魂がああの世にいつてくれれば私は満足じゃ。ホレ、耳を傾けてみるや」

棺桶が埋まった地面に、エツは顎をしゃくった。すると、

一人の老爺が「ここか」と言つて地面に指を差した。

「ああ、そうです。何かが聞えるでしょう」

に声をかけた。杉の枝にいた二匹のカラスがばさばさとしてる音に、エツはその方向を振り向いた。

「おーい、エツさん聞こえんとかね。みんなが待つておるよ」

エツはゆっくりと振り向いて歩き始めた。

下を見ると足元に蟻の行列があった。蟻たちは、廃棄された古い墓石の山の割れ目を出入りしている。

「ちよつと待つてくれや」

エツはしゃがんで行列を見つめた。風が吹いて木の枝がわっさわっさとして揺れ動き、蟻たちに日の光がちらついた。息を吹きかけても、蟻たちは列を保ったまま突き進んでいく。エツが蟻の通り道に人差し指を立てると、蟻たちが這い上がってきた。エツは指で撫でるようにしながら蟻を土に落とした。日差しが強いなか、エツは立ち上がつて蟻の行列に温かい眼差しを向けた。

葬儀を終えると、遺族は近所の人や親戚、エツを招いてねぎらいの席を集会場の小さな会館に設けるのである。その場で、遺族はエツからカラツバを分けてもらい、玄関先にかざしておくのだった。

この席で、男たちはエツに容赦なく芋焼酎を注ぐ。エツは元々酒に弱く、体調を崩してしまう事態を幾度か経験していたが、このような習わしに慣れてきたせいも、今では注がれた分だけ酒をよく飲んだり、逆に注ぐ方に回つたり

エツは頬を緩めながら手のひらを自分の耳に当てて地面に向けた。

老爺はしゃがみ、首を傾げながら黙つて地面に耳を近づけていった。父親は袖で涙を拭い、その地面を見つめている。しゃがんでいる老爺がなにやら頷き始めると、父親も地面に耳を近づけ始めた。エツと老爺の目が合った瞬間、エツは微笑んだ。

「本当や、真美の笑い声が聞こえる」

老爺は声を上げると立ち上がり、みんなに手招きをして地面を指差した。多く参列者が真剣な眼差しで地面に向かって耳を近づけた。頷くのもいれば、首を傾げるもの、エツに不可解な目を向けるものもいた。首に手拭いをかけている穴掘り二名はじつと見ているだけだった。

「エツさん、ありがとう。これで娘は満足してあの世に逝けたかもしれん。人生に後悔しておらんと思う。わたしたちをあの世から見守つてくれるんじゃないやろな」

父親が話しかけてくると、エツは「ああそうじゃ」とも「と、満足げだった。」

急に青空が広がり、風が吹いてきた。悲しみにくれている静けさが、蟬の鳴き声で破られた。線香の煙が青い空に吸い込まれていく。エツは額を拭いながらまた拝み始めた。

「エツさん行くよ」

みんながその場を去つていくなか、その中の一人がエツにしている。ねぎらいの席は夜更けまで続いた。

宇治山真美は三十一歳で命を絶つた。持病の心臓病だった。十代後半に医者から心室性細動の気があると診断されていた。彼女は大阪で管理職に就いており、生まれ育った神沢集落に戻つてきて、両親と過ごすことを夢みていた。エツはこの娘を知っていた。娘はハキハキして物分かりがよく、エツの家によく遊びに来ていたのだった。エツは真美を自分の孫のように可愛がっていた。

エツの納屋でいくつものカラスがぶら下げてあるのを見た真美が、不思議そうにエツに尋ねてきたことがあった。そのとき、エツはカラツバのことを小学生だった真美に話した。

「この黒い羽が守つてくれる。誰でも安心できるんじゃない。死ぬことは怖いことじゃないじゃ」

真美は、エツが差し出した羽を、手のひらに置くと、「うーん」と言いながら見つめていた。

天国にいける。天使がたくさんいて、おいしいものをいっぱい食べられる。そんな国である、と真美は信じていた。

真美は目を丸くしながら何度もエツに天国のことを尋ねた。そして「死んでしまう」とはどういうことか、を。

一月初旬、神沢集落で九カ月の赤ちゃんが肺炎で亡く

なつた。二十代夫婦が、エツに葬儀をお願いしてきた。今の若い夫婦が、とエツは驚いたが、すぐに同意した。

数日前からの寒波によつて稲尾山系に雪がうつつら雪化粧をしている。南九州と言つても稲尾山系の麓にある神沢集落は、平野部より気温が四、五度低い。そのため道路が凍結することもめずらしくなく、冬場の道路には塩化カルシウムが散布されている。そのため白い道の神沢集落と呼ばれている。エツはタクシーから降りると、杖をつきながら若い夫婦宅に向かった。

棺の中におさめてある赤ちゃんは涎かけが首にかけてあり、肌艶がよかつた。呼びかければ泣くのではないかと思わせる。時折、母親が号泣する。エツはカラツバを取り出すと、全身を掃くように撫でた。

「この子は、成仏できますよ」

エツはカラツバで全身を大きく撫でた。二人は不思議そうな顔をしてエツの振舞いを見ていた。

エツはカラツバを赤ちゃんの指と指の間に挿し込んだ。

翌日、男連中によつて神沢墓地の一角に墓穴が掘られ、赤子は葬られた。

以前、この集落の児童はカラツバを魔よけとして常に携帯していた。だが時代の変化とともにこのような風習は廃れていった。

姿にひきつけられた。噴煙は鹿児島市街地に流れていた。

エツは両親からよく桜島のことを聞かされていた。エツは桜島に元氣をもらっていた。エツの妹は間もなく結核で命を失い、母親は原因不明の病に倒れた。

その数年後、エツは大隅半島にある新富町の神沢集落の、井之島俊夫のもとに嫁いだ。その集落ではカラツバを使って葬儀をおこなっていた。稲刈り前の田圃には多くの死んだカラスが竹の先端に吊り下げられていた。

捕獲されたカラスは、木の枝に吊り下げられて、首元を出刃包丁で切り裂かれ、血抜きされる。血を抜き取るとき、カラスは「ゲーゲー」と口ばしをバクバクさせて奇妙な声を荒げる。その声が家の中まで聞えてくる度にエツは耳を塞いでいた。エツは、食事中にカラスの呻き声を突如思ひ出すと、口に入れていたものを吐き出すこともあった。そんな姿に、夫の俊夫は「慣れじゃ、慣れてくれば当たり前のように思えてくる」と言った。

料理を前にして、俊夫はエツに向かって箸を動かしながらしゃべる。箸と茶碗の当たる音がいつも以上にけたたましく聞えた。

「なんじゃその目は」

エツは両手を膝について俊夫を見やった。俊夫は次々に漬物を口に運ぶ。

「うめーなっ、この大根葉。うちの畑で獲れたんか。カラ

現在、八十八歳のエツは、神沢集落の葬儀人であり、カラツバを使ってできるのは彼女しかいなかった。この集落以外の人は「葬儀人」の存在すら知らない。誰もが葬儀人と聞けば、坊さんや民間会社の葬儀屋さんとか連想できない。最近、この集落に引越してきた人も知らなかった。

エツは、日本の統治下時代の台湾で生まれ育つた。伝染病などで亡くなった見ず知らずの遺体は、山のように積まれていたこともあり、成仏もできないまま火葬や土葬が行われていた。中には遺体がそのままにしてあることも多く、暑さと湿気で腐敗は急速に進んでいった。遺体には蛆が湧き、小学生だったエツは手で鼻と口を覆うようにして通り過ぎ去った。通り過ぎると、背後から「助けて」と、妙な声が聞えた。エツは恐怖に怯えながら外出できないこともあったが、毎日のように目にする遺体に手を合わすようになった。

昭和二十一年九月、妹と母と三人で鹿児島鹿屋かのやにある古江港に引揚げた。敗戦の日からあまり遠くなく、満州や朝鮮からの引揚げ者も多くいた。焼け残った家々が無残な姿を残しているところもあり、また風呂敷包みの骨董を持った軍服姿も多く見かけた。戦争の名残りが消えかけていないことに、エツは気分の沈むことが多かった。その頃、エツは彼方に噴煙を上げている初めて見た勇ましい桜島の

スの血が肥やしになっておるからな」

「そうです。カラスを捕獲している畑で」

エツの拳が震えていた。

「……何を怒っている。こうやってメシを喰えるのはカラス様のおかげじゃねーか。さあつ喰え喰え。日本はまだ貧しいんじゃ。喰えるうちが幸せじゃ」

俊夫は、口の中で茶をぶくぶくさせてゴクツと飲み込んだ。

「この集落では、俺たちみたいな家がたくさんあるんじゃ。カラスを不気味に思うとなにもできん。メシも喰えないと思つとけ」

俊夫が茶碗をエツの前に差し出した。

「ほれ、早く」

俊夫は茶碗をエツの前で上下させた。

エツはゆつくりと立ち上がった。

納屋には、足を縄で括られ、羽と血を抜き取られたカラスがいくつもぶらさげてあり、風を受けて左右交互に回ります。丸くて黒い目は張り裂けんばかりに見開かれており、口ばしには血の塊が付着しており、鼻をつくような臭いが漂っていた。カラスの黒い目が瞬きをしたかと思うと、エツはしばらく納屋に足を運べないこともあった。

納屋や玄関先にカラスがぶらさげてある家がいくつもあった。俊夫の家は、カラツバを使って魂が成仏できるよ

うにする葬儀人として何代も続いた家柄だった。エツは葬儀人の妻として後ずさりできなかった。

「人は死ぬ間際になると、いろんなことを後悔する。死んでも後悔しないように、こうやって最期を見届けてあげらんじや。カラスの羽は魔よけにもなるし、あの世に逝っても見守ってくれる。あの世への見送り方次第で現世に後悔を残すもんじや」

エツは夫から何度もそのようなことを聞かされた。

「後悔を残すって、じゃ、これってこと」

エツは両手を前に出して、手のひらを垂らした。

「それは浮かばれない魂のことだ。そのうちわかるさ」

俊夫は虚空を見ながらやさしく話した。

台湾で見た遺体の山。そこから悔やんでも悔やみきれない死体の山が、エツの脳裡にやきついていった。

葬儀の度に呼び出されていた俊夫は、桐箆の奥にしまいいこんであつたカラツバを取り出して、たすきをして出て行く。エツは俊夫の後ろ姿を呆然と見ていただけだった。

「こうやって時々天日干しをしておかないと羽毛が傷ついて商売にならないんだ。鳥類のなかでもカラスの毛先は案外湿気に弱いから丹念にな」

箆筒の中に新聞紙で包んであるカラツバを取り出して、縁の下で天日干ししている俊夫の姿がよくあつた。

また、俊夫がよくエツに話していたこと——それはこの

は顔を上げて辺りをキョロキョロ見廻した。

「カラスは知能が高い。不気味に思われるかもしれないが、この集落では葬儀をすることにカラツバが昔から重宝されているだ」

俊夫は自慢げに話した。

日が沈むと、カラスが枝木に数匹集まっていた。また稲尾山系に飛んでいくカラスたちが無数の黒いゴマのように小さくなっていった。

俊夫とエツの間に生まれた民子は、現在六十一歳である。小学生の頃から、民子は神沢集落以外の同級生から、恥さらしだとか、カラスを喰う一家だとか、白い眼で見られることが少なくなかった。大抵の神沢集落の人たちは、よそ者扱いをされたり、嫌がらせをされたり、隠れたところでのいじめを受けたりすることが多かった。時には、身に覚えのない盗みの罪を教師から着せられることさえあつた。

——民子もその一人だった。

いじめが続くと、他の集落に家族で引っ越そうとすることもめずらしくなかった。『神沢集落』というレッテルがある限り、神沢集落の人たちは学校での偏見や差別を受けることが多かった。なぜこんな葬儀人という仕事についてのか、とエツは民子からよく聞かれた。

集落はカラスで守られており、神聖な思いでカラスの羽を頂き、神聖な気持ちで遺体に成仏してやることだった。

エツが俊夫と神沢墓地に向かった日のことだった。墓は家から歩いて十五分の所にある。墓地には大勢の人が集まっていた。墓の前に来ると、エツは俊夫が持ってきた手桶を受け取り、柄杓で水を墓石にかけ始めた。乾いた墓石が水を吸い込むかのように、石の表面がすつと乾く。傍らで、俊夫が添える花を分けていた。

近くには鹿屋海上自衛隊基地がある。金属音を響かせながら一機の飛行機が頭上を飛んできた。すると俊夫は立ち上がり、飛行機に指を差して言った。

この自衛隊基地は、特攻基地でも有名で、何百人もの神風特別攻撃隊が沖繩へと飛んで行った。神沢集落からも前線へ出撃していく者が多かった。たくさんの戦死者がでた。この集落では兵隊一人ひとりにカラツバを渡した。兵隊はみんな涙を流してポケットにしまひ込んだ。彼らが戦死しても彼らの魂だけはカラツバに乗り移っている。靖国神社で会おうとみんなが誓い合っていた。

エツは自分の父親が沖繩戦で戦死したことを告げた。

墓の掃除が終わると、エツと俊夫はカラツバを墓の前に置いた。お香の煙が墓の周囲を包んでいる。カラスの不気味な鳴き声が木々の間から聞こえる。カラスが枝葉とぶつかりあう乾いた音が木々の中でこだまする。拜んでいたエツ

「死んだ人が幸せになるように、そして親族が温かい気持ちでお見送りできるようにする立派な仕事なんだよ」

と、エツは真面目に応えた。その度に、民子は首を傾げて泣きながら反抗することもしばしばあった。

民子から言われる度に、エツは葬儀人を何度もやめようと思っていた。

俊夫は四十代ですい臓がんに侵された。がんで苦しむ自分の姿を、俊夫はエツや民子にはいっさい見せなかった。がん細胞は、リンパ腺によって全身に運ばれ、もはや手のほどこしようがなかった。俊夫は何度も死にかけたが、誰かが見舞いに来ても陽気に振舞っていた。入院中、激痛に耐えられない俊夫には数十本のモルヒネが投与された。鼻から管を通され、食事がまったくできないことが多かった。眼を閉じたままの俊夫を見ると、エツは辛かった。

俊夫は気分が良いとき、ベッドから車椅子に移って眼前の雄大な桜島を眺めていた。俺はあの桜島のような男になりたい、と俊夫はエツや民子によく話していた。

俊夫の落ちくぼんだ目のまわりにできた影は、日に日に深くなっていく。二十四時間体制の点滴や排尿チューブ……。ベッドの横の点滴装置からは、モルヒネの液体がわずかな狂いもなく、定期的な音を立てて落ちていった。

入院が長引き、病状は悪化するばかりで、気丈に振舞っ



ていた俊夫もさすがに弱音を吐くことが多くなった。

「死んだ人を見届けるのがワシらの仕事じゃ。こんなにも瘦せ細って、もうじきあの世に逝くのかと思うと……」

俊夫は自分の頬を撫でながら言った。

エツは誰もいないことを確認して、カラツバを取り出した。カラツバを見た俊夫は、大きく頷いた。エツは、カラツバを俊夫の胸元に置いた。

数日後、俊夫は「自分はカラツバによって天国に逝く。人生に後悔をしていない」と言い残してこの世を去った。

医師が来るまでエツは俊夫を抱きついたままだった。

エツはカラツバの葬儀で俊夫を丁寧に送った。生まれ育ったこの集落のために死んでいった俊夫に、エツは計り知れない悲しさを抱いた。葬儀のとき、民子は自分の部屋で膝小僧を抱きかかえて座っており、ほとんど俯いたままだった。俊夫が四十八歳でエツが四十六歳のときだった。

夫の跡を継ぐために、エツは見よう見まねで覚えたカラツバを使って、葬儀をおこなっている。カラツバを使った葬儀は年々少なくなっていた。

火葬が当たり前の今日、多くの人がカラツバなど嫌悪して見向きもしないが、たまにはエツのことを聞きつけて依頼してくる人もいた。特に自殺が多い——いじめ、病苦、ストレス社会におけるうつ病など。ときには遠方からはる

付き添いの女性がその男性のズボンの裾を握ると、男は不機嫌な顔をしてしゃがみ込んだ。エツはカラツバを胸元にそっと仕舞いこみ、遺族に一礼し、その場を去った。

最近になって、動物愛護協会の人々が抗議に来た。カラスの羽を使うとは、動物虐待だというのだ。エツはしみじみと時代の流れを感じていた。

「死んだ人が心地よいか満足とかわかるものか。お前は遺体の気持ちで理解できるのか」と抗議団体の代表が言ったので、エツは無言で玄関のドアを閉めた。

「こんなクソ田舎で、妙な葬儀をしやがって。金儲けのためだろう。えっ年金だけで暮らしていけねーのかよ」

男はドア越しに言いながら、タバコを地面に落として足先で踏みつけ、家の裏に廻って畑を見渡した。

「捕獲したカラスはどこにいるんじや。えっどこじや」

男は裏庭の倉庫をのぞいていた。エツは部屋からじつと男の様子を窺っていた。男はぶつくとひとりごとを言いながら地面を蹴り、そのまま帰って行った。

エツは戸棚から和紙に包まれたカラツバを出し、手にとって見つけた。日当たりのいい部屋で新聞紙を広げて、カラツバを並べる。カラツバが日を浴びる。すると、毛の一本一本が逆立って膨れ上がってきた。張りつめたカラツ

ばるやってくる人もいた。

満足して成仏してくれるように、という家族の希望である。葬儀の依頼があれば、エツは腰痛や体調不良のときでも足を運ぶ。だが、カラツバの葬儀を実際に見ると、土葬は嫌だとか、誤魔化しだとか言い出すのもいた。

エツは遺体処理専門員として見られることもめざらしくなかった。遺体処理専門員は、遺体を片づけるいわば流れ作業的なものだが、エツは、魂を成仏させる葬儀人としての誇りを持っていた。

ある日、神沢集落の中学三年の男子が、無免許のオートバイ事故で命を絶った。日頃から素行が悪く、授業を頻繁に休むこともめざらしくなかった。オートバイは盗んだものと判明。祭壇に安置された彼の顔には血がまだいくらか付着していた。エツは少年と顔見知りということもあって、通夜に足を運んだ。十代で命を絶った少年に無念さが残ると同時に、日頃の素行が仇となって起こった事故だっただけに、エツは複雑な心境だった。エツは棺の前でカラツバを取り出した。

「変な儀式は行わない」

一人の男性が立ち上がり、エツの背後から近づいてきた。

「なにを言うの、私が頼んだのよ」

少年の母親はハンカチを握りしめながらその男性を睨んだ。

バをつかんで天井へ向けると、縁側でカラツバを干している俊夫の姿が、目の前に浮かんできた。俊夫は乾いた布で一本ずつ丁寧に拭いている。

「みんなわかっちゃおらん」

エツが口にした途端、俊夫の姿がすっと消えた。

神沢集落の自治会長がエツの家を訪れた。

「エツさん、カラスを生け捕りにして死者とともに成仏させるってなんだか今の時代にそぐわなくて……。わしらの集落が再び変な目で見られとる。習わしといっても時代時代にあった風習というものがあるからの」

エツは黙ってお茶をゆつくり飲んだ。

「今でもカラツバを必要としている人はいる。魂が成仏できるように、私は死ぬまでやるよ」

「じゃがな……」

自治会長は、辺りを見回した後、さらに話した。

「あなたも一人暮らしで大変じゃと思うが、いっそのこと施設に入所したらどうかね。町が一部負担をしてくれると言っているから」

エツは顔を横に振った。

「金はなんとかできる。娘さんと相談したらどうかね」

「夫が築き上げてきたこの地に骨を埋めるつもりじゃ。あんたが心配することはないがね」

エツは立ち上がり、奥の部屋へ入って行った。

「わたしは民子をあてにしておらん。さあ帰らんね」

奥の部屋からエツの声が鈍く聞えた。

「カラツバね……」

自治会長はちえつ、と言って出て行った。

家の前の電柱にカラスが一羽とまっていた。カラスは首をキョロキョロさせていたが、動きが急に止まり、顔を突き上げるように自治会長をのぞき込み、奇声をあげた。彼は立ち止まり、カラスに向かつて、何かを投げるふりをした。カラスは再び奇妙な鳴き声をあげて、ワツサワツサと音を立てて飛んでいった。

神沢集落の晴れた夜は星が降るように美しい。虫の音が、家の四面をとりまいている。周辺の家は空き家になっており、エツの家だけほつきり明るく浮いて、しんと静まり返っていた。深々とした樹々の眠る息づかいが迎りの大気にズシリと沈殿し、その重みが心地よい安定感をその夜に与えていた。

ある日、葬儀が終わって家に帰る途中、自治会長がまたエツに話しかけてきた。

「エツさん、あの若い夫婦の赤ちゃんの葬儀をしてきたのだったね。もう、これからはカラツバを依頼してきても断つ

てくれや。エツさんがこんなことをしていると、この集落に対する偏見がいつまで経ってもなくなるらない」

エツは黙ってその場を去ろうとした。

「エツさん、わかってください。時代が時代だからね」

エツは立ち止まって、振り向いた。

「あんたもこの集落に長く住んでいたらわかるじゃろう。長年培ったやり方に……」

エツは地面を杖で強く叩き、両足を震わせて町内会長を睨みつけた。

「エツさんは全然わかっているじゃない」

「わかっているのはあんたじゃ。よちよち歩きの子は、何もできなかった。もつともつと甘えたかったんじや。できることと言えば、カラツバに守られてあの世に逝くことだけじや」

動物愛護協会の代表もエツの家にやってきては、カラスの捕獲の真相を確かめたい様子だった。

「カラスをどうやって捕獲してるんじや。あんたみたいなババアが器用なことできるわけがなか」

「獲るのはわたしの勝手じや」

「なんじや、白状しいや」

エツは奥にいったん引つ込んだ。その様子に男はにやけていた。エツは茶碗を持ってくると、「バチあたりめ」と

叫び、その中から塩を掴んで、男たちに投げつけた。

「お前たちは死んでもうて地獄に早く逝け。魂は浮かばれんからな」

エツは男が去ったのを確認すると、仏壇の前で泣き崩れた。声が畳に伝わるくらい、顔をすりつけて泣いていた。

六十五歳になる蔵前チツコは新富町の特別養護老人ホームで、ホームヘルパーとして働いていた。

ある日、エツはチツコから葬儀を依頼されて施設に出向いた。

施設の中庭には、穏やかな日射しを浴びたコスモスやマリゴールドが花壇いっぱい咲いていた。こんな天気の良い日は車椅子のお年寄りを庭に出して花を見せてあげたいとエツは思った。

エツが花に見とれていると「ちよつと、いいですか」と、チツコが声をかけてきた。

チツコは施設の中の霊安室に隣接する倉庫にエツを連れて行った。チツコが倉庫の厚い扉を開けると、ひんやりとした空気が肌に当たった。段ボール箱やビニール袋が乱雑に散らばっている。

「驚かないでください。おおやけにしてないものですから」

チツコは風呂敷に包まれた骨壺を持ってきた。ねずみ色の風呂敷は埃をかぶって白っぽくなっていた。

チツコは風呂敷を外し、骨壺の蓋を開けた。

「彼女は身寄りがなくて、昔の友達に会いたいと言って死んでいった。葬儀もちゃんとできなくて、今こうやって倉庫におさめてあるのです。火葬はしたものの、わたしはいつもこの遺骨が気になって気になって。それでエツさんを呼んだんじや。この方の魂を成仏させてあげてください」

エツはしばらく考えて頷いた。

「これじゃ成仏できんわ。魂はどこかをさ迷っているんじやろうな……。仕方ない」

エツは和紙を広げてカラツバを取り出した。

チツコは不思議そうにカラツバを見つめた。

「その羽ですか。黒光りしており、何かを引きつける力があると聞いてはいました。ちよつと触さわらせてください」

エツは顔を横に振り、カラツバを引つ込めた。エツは立った状態で骨壺に祈り、目をつぶり、小さく語りかけた。チツコは最初、エツを不思議そうに見ていたが、すぐにチツコ自身も祈った。語りかけが終わると、エツは遺影にカラツバをかざし始めた。

二十分くらい経つただろうか。

「これで彼女は、みんなを温かく見守ってくれるでしょう」

エツは柔和な表情をした。

「本当ですか。エツさんのことやから嘘はついていないと信じておりますが。とにかく安心しました」

チヅコは亡くなった本人の写真を机の引き出しから取り出し、机の片隅に立てかけた。

「ここで行った葬儀は人に口にしないことです」

エツは真剣な表情で言った。

「わかりました。それでも、こんな羽を使って世間からいろいろ言われませんか。わたしもいつあの世に逝くかわからんが、死んだ人から聞いたわけじゃないから、本当にこれで魂が成仏するとか、しないとかな……」

チヅコが申し訳なさそうに言った。

「いやいやごめん。エツさんがすることに反対はしていません。ただね……」

エツは顔をすつと上げて、チヅコに顔を近づけた。

「この施設には何十人も居るけど、おそらくみんなは火葬を希望しておると思っています。死んでから土の中で腐敗して哀れになるのもどうかと……、そうなるなら僕は戻ってこれんのじゃないかと……」

チヅコは神妙な面持ちで話した。

「そんなことはなか」

エツは声を荒げた。

「死んだ人のことを思って供養すると笑顔がちゃんと出てくるのだ」

「笑顔？」

「そう笑顔。見返り仏と言っておるんじゃ」

養護老人ホームから帰ろうとして、エツはドアの開いた部屋に目を留めた。一部屋に四人寝ている老人は口を開けた状態でほとんど動いていなかった。

別の部屋に慌ただしく入って行くヘルパーと医師にエツは挨拶をした。医師はすでに処置に入ろうとしていた。

そのまま歩いていくと霊安室が見えてきた。霊安室で立ち止まると、引き込まれるかのように足元が軽くなり、エツはドアノブを掴んだ。ドアノブが妙に冷たかった。中では蝨燭の炎が揺らめいて、線香の香りが漂っていた。エツは足の痛さも気にしないで中をのぞき続けた。ようやくドアを閉めてその場を去ろうとしたとき、誰かがエツを呼んでいるような気がした。振り向いても誰もいない。エツは霊安室を再びのぞいた。蝨燭の炎の揺らめきと明るさの陰陽が際立っている。倉庫の傍に置きっぱなしにされていたあの遺骨が、エツの脳裡から離れなかった。

車椅子に座っているお年寄りの多くが、空ろな目をしており、石像みたいな硬い表情だ。エツが挨拶を交わしても無表情だった。ここに居れば生活の心配はない。が、食べて、出して、風呂に入って、寝るだけの毎日。

——本人にとって幸せと言えるかどうか……。エツの心の中を冷やかな風が吹き抜けた。

葬儀人としてのエツは、しだいに足の痛みや体力の衰え

「見返り仏？」

チヅコはエツを不思議そうに見つめた。

「死んだ人の顔をよく見てください。口角が少し上がっている。まるでこれから天国で幸せに暮らしてきますと言っているように見える。わしらを見つめ返すみたいだから見返り仏と言っているんだよ。だが三々四日経つと顔は沈んでくる。筋肉が硬くなってくるからじゃ。いわゆるこれが本当の死顔なんです」

チヅコは目を丸くした。

「見返り仏の状態でカラツバの儀式を行うと、土の中で腐敗しようが、どうなるうが、見返り仏のままであの世を渡り歩くのさ」と、エツは静かに言った。

「笑顔……。そんな、信じられない」

チヅコは首を傾けながら微笑してエツを見つめ返した。

「この辺でも魂がうようよしておる。見返り仏の状態だったらいいが、そうでないとこの世に出てくる」

チヅコは振り向いたり、首を振ったりしている。

エツは窓がある方向を指差す。すると、チヅコは驚いた表情で窓に顔を向けた。

「この骨壺はもう手遅れじゃないとかね」

チヅコは骨壺を指差した。

「そんなことはなか。ちゃんと成仏しているさ」

エツの表情が再び緩んだ。

を感じつつあった。

十一月、神沢集落では年に一度の『見返り齋』が寺で行われる。死んだ人の魂が、十一月の第一土曜日に戻ってくるのだ。それでも年々、参加者が減少していた。

エツも葬儀人として足を運んだ。参加者は手首に数珠を巻き、額と頬を白く塗るのである。エツは米粉でできた白粉を顔に塗り、二つの数珠を両手首に巻いた。十人くらいの人が集まっていた。七月に亡くなった真美の両親もいた。エツは夫や自分の両親や妹も吊った。

神主がみんなの前に立って幣を振りかざした。その後で、葬儀人がカラツバを振りかざすのだ。エツは杖をつきながらゆつくりと前に向かう。エツは胸元から和紙に包まれたカラツバを取り出し、みんなの前で大きく振りかざした。

どこからかひそひそ話が聞える。誰かが笑っている。話し声がしだいにエツの耳の奥で大きくなった。男性の唖れた声だった。

「死んじまえー死んじまえー」

エツは両手で耳を塞ぎ、天井を見上げ、目を白黒させて叫んだ。冷汗をかきながら眩暈に襲われたエツは、しゃがみこんだ。室内は騒然となった。

エツは神主に別室へ連れていかれた。

「神主さん、わたしや、もう葬儀人をやめようかと思ってる」

顔色がよくなり、落ち着きを取り戻したエツは、天井に目を向けながら話しかけた

神主はしゃがんでエツの枕元で耳をかたむけた。

「今の時代にふさわしくないのかもしれない。娘からも冷たくされておるし……。なんだか疲れてしまうた」

エツは、息を詰まらせながら、とぎれとぎれに声を出した。

「エツさんらしくないよ。この集落のためにいつまでもがんばっておくれ。エツさんしかおらんじやないか。集落のみんなのためにもぜひお願いする」

神主はエツの肩を軽く叩くと、エツは声を押し殺した。

火葬場に向かう葬儀用の貸切りマイクロバスが目の前を通り過ぎる度に、エツは目を背ける。新富町に隣接する加納市に一つしかない火葬場。火葬場には五基の窯が並んでいる。今日も、神沢集落の一人が亡くなって、バスが火葬場に向かうところだった。

「誰もが火葬場の窯のスイッチを入れるときには必ず躊躇するんじゃない。あんたもそうにちがいない」

神主がエツに声をかけた。エツは虚空を見ながら頷いた。人が燃えていく。一瞬にして焼き尽くされ、灰と骨が白く残る。全身が震えあがったエツは、頭を何度も引つ掻いた。

うとしたが、誰かに手を掴まれた。軍服姿の男性だった。

顔が見えない。分厚い手のひらがエツの手を包むように握りしめていた。どこかに連れて行かれそうになった。その

まま引きずられて行く。

「助けてくれー」と叫んで、エツはつと目を覚ました。

陽は傾きかけ、時計の針は午後四時半をまわっていた。

金属音を響かせながら一機の飛行機が頭上を飛んで行く。

膝にかけてあったキルトをかけなおす。赤く染まった巨大な金属の物体は稲尾山系を超えて見えなくなった。

——何百人もの兵隊が飛行機で飛んでいく。そこにエツの父親もいた。

エツは椅子にかけてある杖を掴んで立ち上がり、夫や父親の仏壇に向かい、「もう心配せんでよかよ」と軽い声をかけた。

エツは同じ県内に住んでいる民子に電話をした。たいした用があるわけではなく、話が終わると受話器を上げたまま見つめている。その後も、エツはダイヤルを二回ほど回すが、途中で止めてしまう。ツーツーという音だけがエツの耳の奥に残っている。エツは受話器をゆっくり落とし、また受話器を上げて途中で止めてしまう。

エツは民子の声を聞けるだけで安心するのだった。決して長時間、会話を交わすことはなかった。

「あれじゃ、死んだ人がかわいそうじゃ……。エツさんと同じ気持ちじゃ」

神主は、涙をほんのりと浮かべた。

十二月の初めだった。

エツは縁側で、木製椅子の背にもたれ、半開きの日よけカーテン越しに見える外を眺めていた。稲尾山系が目の前に立ちはだかろうとしていた。エツは目を細めた。やわらかい日差しが胸元にかかり、エツはカーテンを閉めようとゆっくり立ち上がった。

電線に止まっているカラスが目が留まった。カラスは羽をばたつかせたかと思うと、顔を左右に振り、口をもごもごさせ、やがて静かになった。カラスはエツの方を向いている。エツは笑みを浮かべながらカラスと向き合った。日差しがエツの顔に覆いかぶさる。カーテンは開けっ放しだった。

カラスの鳴き声がエツの耳元に響き渡った。エツは椅子に深く座り、目を閉じた。

——目に浮かぶものは遺体の山だった。人が人を殺し、病気で亡くなり、食うものも口にできない。会ったこともない様々な顔が浮かんできた。燃えさかる炎に死んだ人が次々投げ込まれていく。炎から人の叫び声が聞える。目に見えない恐怖がエツに襲いかかってきた。いっせいに逃げよ

そんな日が続いたある日のことだった。民子は不安になつて、実家に足を運んだ。

民子は久しぶりに実家を見て呆然とした。——付近は錆びた有刺鉄線で囲まれた空き地があり、雑草がはびこっていた。昭和三十年代に建てられた瓦屋根や錆びたトタン屋根の家が数軒。玄関先も雑草だらけになっており、玄関の戸が壊れたままになっている家もある。

廃屋の中から猫らしきものが数匹うごめいていた。街灯もなく、夜一人で歩くと怖いほどだ。どこからか排泄物と思われるような臭いが漂っていた。様変わりした様子に民子は驚きを隠せなかった。

錆の浮き出た赤い郵便受けには、『井之島俊夫 エツ民子』と書かれた字がうっすらと残っていた。電気メーターの針がゆっくり動いている。

「母さん、母さん」

耳が最近遠くなったのかと思ひ、民子は縁側に座っているエツに近づいた。「母さん」と耳元で大きく声をかけると、エツはゆっくり振り向いた。まるで電池の切れかかったロボットのみたいに反応が鈍い。エツの首元に、そばかすが見えた。長く伸びた白髪に隠れるように、大きな黒紫の斑点がいくつも染みついていた。エツは「ごめん」と何度もつぶやく。民子は「もう昔、ずっと昔のこと」と、言



いながら顔を横に振った。

仏壇には家族の遺影が飾ってあった。民子はエツの部屋に入り、明かりを点けた。独りで暮らすには充分すぎる部屋だ。引き戸にはカラツバが並べてある。

カラツバ一本一本に触れてみた。カラツバの芯を指でつまみ、上下左右に見た後、くるくる回す。蚊の鳴くような音がした。カラツバの毛先はしなれている。白い微がまだらに付いていたり、綿状になった埃が固まっていたりしていた。

民子の脳裡にかつての状況が蘇った。両親がカラスを生け捕り、手足を縄でくくって、木の枝に逆さまにして縛り、エツがカラスの首に包丁をつきさした。悶え苦しむカラス。民子はむごいことをしている両親を黙って見ていたこと。「やめて」と叫んでも黙々と続ける姿に泣いた。

「民子はあっちへいっとくんだ」と俊夫が言っても、民子はふてくされたままだった。指をくわえて泣いている民子連れて、エツは家の中に入った。

記憶を蘇らせながら、民子はほんやりと部屋の中に立っていた。どこからか隙間風が入ってくる。足元がひんやりとしてきた。蛍光灯がジジッ、ジジッ、ジッと音を立てながら点滅する度に、カラツバが白く反射した。

民子はカラツバを一つ一つ手にとって新聞紙に広げた。エツは縁側に座って庭を見つめている。民子はエツの様子

を窺いながらカラツバを数えた。ゆうに二百をこえていた。カラツバを新聞紙にくるみ、庭の畑に向かった。

民子は雑草が生い茂る畑の隅を掘った。包みごと中に埋め、土をかぶせ、移植ごてで何度も叩いた。

エツは外をまだ見ている。民子はエツの隣に座り、桜島を指差した。エツは口元をプルプル震わせながら「あーっ。アッアッ」と言っただけで立ち上がろうとした。

「さあ、もうじきこの家とはおしまいよ」  
民子はエツの耳元で話した。

「みんなとはもう会うことはないの」

エツは黙って民子を見ているだけだった。

桜島が噴煙を上げていた。見たこともない大きな噴煙がもくもくと膨れ上がっていく。夕陽を浴びた噴煙は真っ黒に映っていた。

エツは手足の震えが目立ち始め、食欲が低下して、歩行困難になり、動くことが苦痛らしい。だが、縁側に座り、外を見ていると心が和むようだ。口元の震えも目立ってきたので、民子はエツを病院に連れて行くことにした。

脳外科医は、エツの脳内CT画像をポールペンで差しながら、初期のパーキンソン病であることを告げた。医師が説明している間、エツは黙って画面を見つめているだけだ。民子は歯をくいしばっていた。

加納市の総合病院に入院することになった。

「わたしを殺す気か。絶対に死ななぞ。みんなが待つておる。カラツバはあるのか。夫はどこじゃ」とエツは民子の顔を見ながら声を荒げた。

入院準備のため、民子は再び実家に戻った。玄関に『魂天逝戻地』と書かれた紙が貼ってあり、風でパタパタと揺らいでいた。民子が四隅を固定していると、表札から一つのカラツバが落ちてきた。

羽は風に煽られて地面を滑るように去って行く。  
民子は去って行く羽を、呆然と目で追っていた。

(「じゅん文学」70号より転載)



インターネット文芸新人賞

## 緑の手紙 五十嵐勉

カンボジア難民ボ・シティはなぜ発狂したか。フィリピン戦線の生き残りの父と戦跡を訪ね、カンボジア難民の告白と重ねながら平和日本の矛盾を告発する問題作

アジア文化社 1700円



若草田ひずる

わかくさだ ひずる

本名/鶴田総宏

1968 鹿児島県肝属郡高山町(現・肝付町)生まれ

「じゅん文学」(名古屋市)同人

2006 南日本新聞社主催「新春文芸短編小説部門」1席

09 コスモス文学賞奨励賞(短編小説部門)

11年 コスモス文学新人賞奨励賞(中編小説部門)

鹿児島県肝属郡錦江町在住

## じゅん文学

愛知県

## 百号までは

今回「じゅん文学」七十号の「見返り仏」が同人雑誌優秀作に選ばれて、五十嵐編集長から「久しぶりにこちらの活動状況を知らせて」と言われた。そういえば、初めて「じゅん文学」が紹介されたのも四十五号に載った作品が優秀賞に選ばれたからだのだ。

あれから一作も選ばれなかったのかと気づいたり、二人も選ばれたのは嬉しいことだと思ったり、何やかや感慨にふけりながら、二〇〇六年秋号の『文芸思潮』を本箱から引っ張り出してきた。六年も経っていて、何を綴ったのか記憶が薄れかけている。

「一九九四年六月に創刊して今年十二月には五十号を出す」とか「同人五八人、男性三二人、女性二六人」など、いろいろと書いてあったが、真っ先に、五十号記念号のことを懐かしく思い出した。

五十号は節目ということもあり、全員参加を目標に作品を募ったら、創作が二二、エッセーが五、短詩型作品が七、も集まって、三八〇頁の厚い雑誌になった。しかも、その



「じゅん文学」例会風景

号は第三回「富士正晴全国同人雑誌賞」の特別賞を受賞して真正正銘の「記念号」になった。二〇〇七年十一月には、五人の同人と一緒に徳島県三好市の授賞式に臨んだ。それまでの苦労が報われた思いと、同時にその後の励みにもなった。

それから六年、最新号は七月一日付発行の七十二号である。同人の数もあまり変わりなく、ますますという感じではあるが、それなりの苦労や、多少の変化はあった。

全体的に年齢層が上がったのはもちろんだが、いちばんの変化は、今は顔も知らない同人が幾人かいることだろう。同人雑誌というのは会員の出入りが激しいもので、大抵は二、三年くらい書いて辞めてしまう。どこの同人誌で

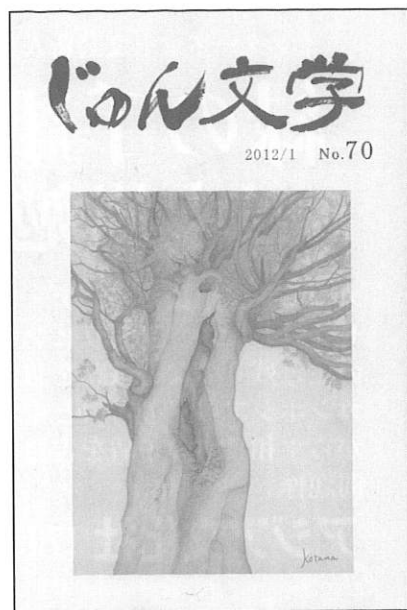
も、信念を持って続けているのは結局は十五人もいれば幸いというのが普通である。「じゅん文学」も五十号を過ぎた頃から少しずつ辞める人が出てきた。同人費だけは払っていても作品を出さない人も増えた。

私はインターネットで簡単なホームページを作って「じゅん文学の同人になりませんか」と呼びかけた。本当に入会希望者がいるとは思わなかったが、意外に反応があった。

しばらくすると何と、沖縄、鹿児島、熊本、岡山、京都、横浜、東京などの各地から問い合わせがあり、同人の申し込みがあったのである。おそらくは『文芸思潮』で紹介していたいただいたのをきっかけに、同人の多くが『全作家』や『文学街』や『季刊文科』で取り上げていただくようになってきたからだろう。

原稿はメール送信に限定し、同人費と掲載費さえ振り込んでもらえたら作品を掲載している。なかには推敲不足と思われる作品もあるが、送り返しても、皆さん、きちんと推敲し直し、誠実に対応してくださる。合評会には出られなくても、最初のうちは掲示板で同人同士の批評が飛び交って活気があった。私は作者がどんな人か詮索しない主義なので、気楽に入会できたのかもしれない。

今回の受賞者もネットを通じての同人で、私は今さらのごとく、若草田ひずるさんがどんな人か全然知らないこ



とに驚いた。鹿児島県の住所とメルアドレスと携帯番号以外、判っていない。本名で男性であるとは確信していたが、年齢も聞いたことがなかった。

六年前の受賞者の古澤崇さんについては、学歴から経歴までほとんどことを知っていたと言っても過言ではない。彼は大学生の頃に私の文章教室に入ってきて「じゅん文学」の同人になった。合評会にも積極的に出てきたし、二次会にも出席して地元同人の多くに慕われていた。

二人の同人の違いには、同人雑誌のあり方を考えさせられたりもするが、どういふ状況が良いのか悪いのか、答えは出ない。いずれにしても「じゅん文学」が五十号以降の六年間も、一年四回の発行が維持できたのは、やはりホームページのおかげだった。

創刊して十八年。時代は刻々と変化している。最近はまだ少しずつ地



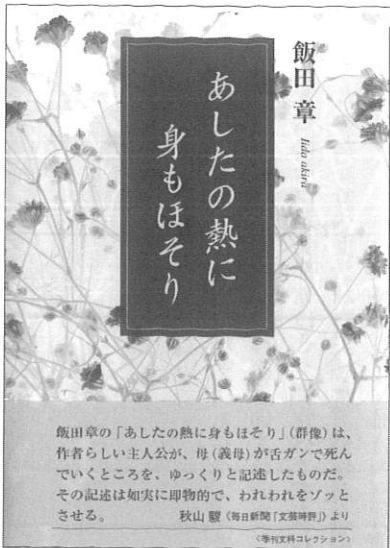
元中心に戻りつつあるようだ。今はブログなどでも小説を発表することが出来て、わざわざ同人誌に入る必要もないだろう。ネットでの新入会者もなく、退会者も出てきた。顔の見えない同士のやりとりには歯止めが利かないし、不特定多数の「アラシ」に襲われることもある。掲示板での批評は不可能になったし、入会の方や、遠方、地元など関係なく、若い人は短期間で辞めていく。同人誌はプロ作家志望の人には役に立たないという認識もあるようだ。

（「じゅん文学」主宰／戸田鎮子）

じゅん文学の会  
〒四五八・〇八二  
名古屋市緑区神の倉三・三  
戸田鎮子方 TEL052・876・5476

# 飯田章新刊 あしたの熱に 身もほそり

鳥影社 定価（本体一五〇〇＋税）



飯田章の「あしたの熱に身もほそり」（群像）は、作者らしい主人公が、母（義母）が舌ガンで死んでいくところを、ゆっくりと記述したものだ。その記述は如実に即物的で、われわれをゾッとさせる。

秋山 賢（毎日新聞「文壇時評」）より

群像文庫コレクション

## 行き場を求める人間の不安を温かい眼差しで描く

### 週刊読書日記

2月×日 唯川恵著「途方もなく舞は流れる」（新潮社 1500円）を読む。冬の軽井沢を舞台にしているが、目に入る浅間山は峻烈な美しさをそびえ立ち、文章はまろやかで、展開する物語は温かみに満ちている。それでいて行き場を求める人間の不安を描き出す筆力はのびやかだ。今回は珍しく50歳前の男を主人公にしらべて、彼の周囲を取り巻く女たちはしたたかながら、純粋で美しい。

### 高橋 三千綱 作家

ただしその心の奥底には本人も気付くことのない、毒のある花びらがちりばめられている。それが読者にとってはた

まらなく魅惑的だ。男がいつまでもにやけていると心臓に希望と戦慄が撃ち込まれるのを警告してらる。

もうひとつ、この長編には主人公としての思い出深い女や、他者から高等遊民とみられるが、最初だが、作家個人の唯川さんにとつて夫は女として生きる糧になっていた。作品の眼差しが温かいのはそのせいだろう。



2月×日 飯田章著「あしたの熱に身もほそり」（鳥影社 1500円）を読む。作者も出版社も一般の人に馴染みが薄いだろうが、飯田氏は74年に「連子とその夫」で群像新人賞を受賞し、「あしたの熱に身もほそり」では87年に芥川賞の候補になった純文学一本の作家である。飯田氏は私小説作家ではないが作品には自らの体験が色濃く滲み出ている。その文学姿勢は独特であり冷徹でもある。この作品でも死んだ父の2度目の妻が舌がんで死んでいく様を描きながらも慟哭することなく、筆が上滑りするところに越したという、長編小説の中で大と浅間山が登場するのは「群像」で二回（今回は三遊亭遊馬さん）



途方もなく舞は流れる 唯川恵

が登場するのは「群像」で二回（今回は三遊亭遊馬さん）

日刊ゲンダイ 2012年3月12日（日）



# 黒い水

佐佐木邦子

袋と同じになった袋部分にそつと竹ペラを入れると、かすかな音をたててページが剥がれた。小さな穴が不規則にたくさん開いて、砂の粒が光る。

お、今日は素直に剥がれてくれそうだな。麻実は心なしほつとした。今日は何にも考えたくない。作業に没頭していれば考えることから逃れられる。そのためには洋紙よりは和紙が、インクよりは墨が、とにかく単純で丈夫な方がよかった。

次のページをつかんで、ページの間に竹ペラを入れた。湿ってかびているが、やはり抵抗なく剥がれてくれる。文書のページがめくれる、という当たり前のことが、ちつとも当たり前じゃないんだと、このボランティアを始めてから思うようになった。

「市立博物館の特設コーナーに、お茶箱が展示してあるの。何の変哲もないお茶箱なんだけどね、女川町の古い民家から出たものなのよ。今度の津波で壊滅した土地。町の指定文化財だった古文書が入っていたんだって。四つあったそのお茶箱も流されて、一つだけ対岸の塚浜に打ち上げられたの。塚浜で後片付けをしていた人が見つけて、大事なもののらしいというんで、たまたま通りかかった宅配業者に役場の教育委員会まで持っていつてもらったんだって。教育委員会も被災して、総合運動場に仮設の事務所を作って避難してたのね。職員が仕事の合間に応急処置したんだけど、手に負えないのよ。それで仙台の博物館で引き取って、さらに奈良の文化財研究所で真空凍結乾燥してもらって、また仙台に戻ってきたの。展示してあるのは、そのお茶箱。そういうのがいっぱいあるのよね」

結城さんが言ったのだ。津波の水をかぶったから、時間が経つほど扱いくくなる。とにかく急いで修復しなければならぬ、そのためのボランティアを募集している、と言われたとき、麻実はためらわずに申し出た。結城さんはPTA仲間で、ご主人は博物館の学芸員をしている。被災地から文書を運んでくるのは別な人たちで、運び込まれたものをクリーニングするだけだとか。根気さえあれば難しい仕事ではないとも言われた。

黒い水

とにかく何かしてないと落ち着けなかった。三月の震

竹ペラで慎重に剥がしていった。ページを剥がすたびに、紙には、針の先で突いたみたいな小さな穴があく。津波が引いたあと紙に残った塩が糊のようにくっつき、さらに時間がたつと結晶になって固まるのだ。穴は塩の結晶跡で、こぼれた塩の粒がページの間で光っている。それを刷毛で払い落とす。爪楊枝であけたような、不規則に並んだ小さな穴は、モールス信号みたいに意味ありげにも見える。見方によっては神秘的できれいだ。濡れた墨文字と赤い文字が薄い和紙に透けて、何枚も重なっているのも妙にきれいだ。人事の公文書には等級や給料を赤文字で書いてあるものが多い。

放置した時間が長びくほど始末がつかなくなるから、なるべく早く処置しておく必要があった。

災から何か月も過ぎた。しばらくは無我夢中だったものの、ガソリンが自由に買えるようになり、ガスも水道も復旧すると、麻実の周囲は普段と全く変わらなくなってしまった。

人の記憶なんてチャチなものだ。やさしさはもつとチャチかもしれない。下手すると、あの風景も遠退いてしまう。遠退いたらグチが出る。グチがグチであるうちはまだいいが、それが本音だとなったら厄介だった。大津波の痕跡がはつきり残っているものに、日常的に触れていなければならなかった。

誘われたのが、夏休みの初めというのもよかった。学校が休みで子供たちが家にいる。長い休みは自分の子供だけだってイライラすることが多いのに、なつかないよその子供がいたら、もつとイライラする。子供だって、麻実が始終家をあけていた方が、気楽なのではないかと思った。

古文書修復がメインと聞いたが、被災文書は古文書だけではなかった。民家だけでなく、学校も役場も津波でやられた。保管されていたおびただしい文書も海水と一緒に流れ出ていた。大事なものの、大事でないもの、公的なもの、私的なもの、当事者は目の前のことに精一杯で文書まで手が回らない。一般の行政文書、学校関係の書類など、なるべく早く手を着けねばならない文書が、段ボール箱で部屋の隅に積み重ねられていた。



今やっているのは旧北上町、現在は石巻市に合併された寒川の尋常小学校の学籍簿だ。本当なら並んでいる順に端からやるべきなのだが、その近辺の土地のものが目に入ると、麻実はいきなり手を出してしまう。

夫の出身地、つまりアイツの出身地だ。夫の出身地についてはあまり関心を持ったことがなかった。今度の震災がなければ、いや震災があったにしても、夫がアイツを引き取るなどと言ひ出さなければ、関心など持たずにすんでいただろう。郷里を追われた夫は自分から郷里について話すことはめつたになかったし、麻実を郷里に連れていったこともなかった。

大変な田舎でね。本家とか分家とかすごいんだよ。本家の顔を潰したとかって、親父とおふくろと、ほんの子供だったおれと親子三人、石でもぶつけるようにして追い払われた。欠け皿一枚おまえらにやるものはない、郷里があるなんて思うなと叩き出された。おかげでこの街に来てからも、どれだけ苦勞したことか。苦勞なんてもんじゃなかった。おふくろが早死にしたのだから、そのせいみたいなものさ。親戚なんておれにはない。あんなとこ、二度と帰る場所じゃない。

そうでなくたって自分の子供だけで手一杯だった。世帯を持って夢中で暮らしているうちに二十年過ぎた。下の子の海斗が中学になったから、これまでみたいな半端仕事で役員を、祐介のためには進んで引き受けた。

アイツ、どこへ行つたんだろう。麻実はさつきから無理に押さえていたことをまた思った。夕べ少々叱りすぎたのは確かだが、それが出てゆくほどのことか。今朝起きたらいなくなっていた。買ってやった自転車とスポーツバッグもない。夫は仕事を休んで朝早くから探しにいった。「家へ帰る」と言っていたそうだが、津波で流されて家なんかどこにもないのだ。家どころか町そのものが消えてしまった。

祐介がどこへ行つたか考えるとイライラした。夫も子供たちも、祐介が出て行ったのは麻実がひっぱっていたせいだと思っている。「おかあさんが家にいると、祐介、帰つて来づらいかもよ」と大学二年の洋子が言った。

「いいよ、アタシ、今日は家にいてあげるから。おかあさんはどっか行きなさい」

まだ夏休みが終わらない洋子はけつこう時間がある。自分から帰ってくるか、夫が見つけてくるか、どっちにしろ必ず電話をくれるよう言い置いて、麻実はボランティアに出してきた。車で二十分ほどの市内の大学だから、何かあつたらすぐ戻れる。

湿ったページをめくるたびに、塩の臭いともへドロの臭いともつかないおかしな臭いが立ちのぼった。津波の臭いだ。ページは端がめくれ上がり、ところどころに泥ともへ

はなく、そろそろフルタイムで働こうかと思つていた矢先だった。そこへ持つてきて、会つたこともない小学六年の男の子。会つたことがないどころか、夫にそんな親戚の子がいたなんてことさえ知らなかった。長い間音信不通の兄がいる、とは聞いたような気がするが。

おれだつて知らなかった、と夫は言つた。夫が音信不通だつたのはこの兄だけでなく、祖父母、伯父伯母、本家分家、その土地に住んでいた親戚全部だった。今回の津波で壊滅した土地のひとつである。兄夫婦とその二人の子のうち一人が亡くなった。多かれ少なかれ親戚全部が被災して、まぬがれたのは早々とよその土地に移っていた者ばかりだった。いくら夫が郷里から追い出されたも同然だつて、他に引き取り手がないなら知らないふりを通すことはできない。夫にしてみれば甥である。祐介といった。

厄介な子供だった。何でもないことで大声を上げる。すぐに黙り込む。話しかけても無視する。それでも初めは、親兄弟と祖母を一度に亡くして、気持ちが不安定になっているのだと思つていられた。だがいつまでたつても打ち解けない。

新しい学校に溶け込めないらしいので、麻実は自分から手をあげてPTAの役員になった。役員にでもなるしかなかった。役員になれば学校に出入りする機会も増え、先生とも親しくなれる。自分の子供のときは逃げていたPTAドロともつかないものがこびりついている。ピンクや黄色に染まっているのはカビだ。淡いピンクになってしまったカビは取れないが、まだ増殖中の黒いカビもある。こういうのを見逃すとどんどん増えるから、エタノールで殺菌する。へドロが糊になってくっついたページは、剥がすのに細心の注意が必要だった。

昭和前期の尋常小学校児童学籍簿だった。「昭和六年二月二六日大雪のため交通杜絶、公認欠席」という文字が表れた。いくら北国だつて海辺だから、雪はそう多くないと思つていた。交通が杜絶するほどの降雪とは、どんな雪なのだろう。全部のページに書いてあるわけでもないから、登校した子供もいたらしい。学校の権威はたぶん今よりもずっと大きくて、何があつても子供は学校に行くべきだとされてきた時代のことだ。それでも登校できなかった子供は少なくなかった。登校した子供とできなかった子供の家の位置関係は、どんなだったのだろうか。

麻実は、よく知らないその土地の様子を、頭の中に描いてみようとする。追波湾に面したリアスの浜である。今は立派な国道ができた。だが昭和初期なら。海沿いなのに山ばかりの、峠で区切られた細い道を、子供たちは群れを作つて集団で登下校していたのだろうか。

寒川の町には、津波の一月後に一度だけ夫と行った。町、と言うより、もと町だったところ、と言つたほうが正

確だろう。家も畑も港も、とにかく何にもなかった。ほとんどの建物がなくなった狭い谷あいには、廃物捨て場にしか見えなかった。暮らしの匂いを残した家財道具の破片がそこここに積まれ、山ぎわには逆さになった船の残骸が打ち上げられている。駐車場だけでなく、港にも草むらにも、ヘドロまみれの軽トラックが腐ったジャガイモのようにごろごろ転がっていた。

仙台近くの海辺の被害も大きかったが、峠で区切られたリアスの浜はまた特別だった。もともと平地が少なく、山の間のみずかな平地に、へばりつくようにして開けた土地だ。ひとつの集落が壊滅しても、後ろで支えてくれるところがない。映画でしか知らなかった、廃墟、とはこういうものかと、初めて思った。その廃墟が、峠一つ越すごとに現れる。背筋が寒くなった。

砂漠みたいに海底の砂地が現れたそう。港から見えないのはるか遠い沖まで、黒い海底が剥き出しになった。これだけ水が引くからには大変な津波が来るかもしれない。気付いた人たちが大声で叫びたてた。動けるほどの人はみな表に飛び出し、海を見た。海なんかどこにもなかった。あつたのは、延々と続く真つ平らな砂原だけ。人々が驚いている間にも、海のあつたあたりに巨大な黒い壁がそそり立った。松林のずつと上、空を覆うほどの高く長い壁が、どこまでも続いている。と思っているうち、その巨大な壁

シともいえる。

「いくら一生懸命こいだって自転車のスピードなんてなあ。どの道走るかわからないから、とにかく現地で待ってるしかないんだが」

出ていったのが今朝だ。寒川までは、まだ行き着けないだろう。途中で迷ったらますます遅くなる。中小の漁村が点在する十三浜の中でも、寒川はとりあえず付近の中心地で、震災前は石巻から定期バスだつて出ていた。今はそのバスもなくなつて、復旧の目途もついていない。

人もほとんどいなくなつたそう。震災から五カ月以上過ぎ、片付けは進んでいるとはいえ、港も、付随する倉庫も作業場もない。船もあらかたが流された。漁師の働く手段がないのだから、浜に人なんかいるわけがない。

祐介が一時的に身を寄せていた避難所へ行つてみたが、すでに閉鎖されていた。寒川から峠ひとつ越えたところに仮設住宅ができていて、プレハブの集会所みたいなのが併設されていたから、それらしい子供を見かけたら連絡をくれるように頼んできたそう。念のために役場の仮設支所や警察の臨時派出所みたいなどころへも行ってみた。

明日からは麻実が行つてくれと夫は言った。麻実は驚いた。車の運転は得手ではない。ましてよく知らない土地である。

「国道、つたつて、ただでもカーブが多くて走りにくいじ

が水煙を上げて崩れ落ちたとか。

行ったのはそれでも震災の一月後だったから、国道だけは何とか通れるようになっていた。そういう土地でも中学校は残つたし、中学校よりもっと高い場所に建てられた家も少しはあつた。たつた一度行ったきりでは目の前を見るのがせいぜいで、奥の方まで気が回らなかった。

みんなは片端から仕事を片付けてゆく。どこかへ行つてしまった祐介のことを、ここで考えてみたつて仕方がなかった。手元の文書に注意を集中して、麻実も指を動かし続けた。

夫が戻ってきたのは夜も遅くってからだった。どこへ行ったかわからない。夫は疲れた顔でつぶやいた。石巻市北上町寒川。少し前まで十三浜と呼ばれていた。石巻市の中心部は高速を使えば仙台から一時間だが、数年前に合併した周辺の町村はリアスの浜の間に開けた小さな集落が多かった。十三浜もそうで、人口百人に満たないものを含めて、十三の小さな浜が点在している。電車も長距離バスも石巻中心部までは便利だが、その先はとんでもなく時間がかかった。まして津波のあとである。交通の便は震災前とは比べ物にならないほど悪い。石巻まではバスに乗るにしても、先のことを考えたら、家からずっと自転車のほうがマ

やない。おまけに今は橋が落ちて通れないとことか、津波でコンクリの舗装面が剥がれたとことか、国道そのものがぶつぶつ切れてるわ。この間は、あなたの隣りに乗っているだけでも心細かつたのに」

「おれの有給、よくよく残ってないんだよ。片付けの手伝いだ、葬式だつてだいたい休んだから、出て行った甥を探すのにまた休む、つても……」

あなたが連れて来たんじゃないの。喉元まで出かかったが言えなかった。いくら尽くしても、こちらの気持ち全然通じない子供だった。

朝起きて、祐介がいないと気付いたとき、ほつとした気分がなかつたわけではない。ああ、これでまた親子水入らずの暮らしに戻れると思った。しかし祐介はまだ小学六年で、しかも仙台に出てきて四カ月しかたつていない。三月にあの大津波、四月末に引き取つて五月の連休明けからこちらの小学校に入れた。学校に慣れないうちに夏休みが来て、今はその夏休みも終わった九月初めである。

まずほつとして、それから腹が立って、次に心配になった。その間一秒の数分の一。それにしても、まずほつとしてしまった自分の正直さが情けなかった。着替えて財布とシユラフを持ち出されていたが、小遣いがそれほどあるとは思えなかった。

出てゆくとき、自分のもののほか海斗の携帯電話を持っ

ていった。叱った原因は携帯電話だ。祐介が携帯電話が欲しいと言ったのだ。しかし小学生に携帯なんて好ましくない。

「みんな持ってんだ」

祐介はうなだれて抗議した。

「みんな持って、せいぜい二、三人くらいなものですよ。家の固定電話使えばいいのよ。携帯でないと連絡取り合えない人なんて、いないじゃないの」

「おれ、前は持ってた」

町場の小学生だって、携帯なんか持っていない子供の方が多い。自分の子の海斗にだって、中学になるまで我慢させた。仙台よりずっと小さなリアスの浜で暮らしてきた祐介が、スマホだとかワンセグだとか言うのが気に食わなかった。スマホやワンセグなんて麻実がよく知らなかったから、自分の知らないものを当たり前のように話す子供に腹が立ったのかもしれない。

「震災孤児の養育費、もらってるくせに。カネはちゃっかりもらって、おれには何もなしだよ。おれに来る分のカネ、洋子や海斗に回ってんだべ」

思わずひっぱたいていた。祐介の公的養育費など雀の涙だ。食べさせて、学校に通わせて、着させて、あたりの子供と釣り合う程度の小遣いを与えて、将来大学へ行きたいと言えば行かせるくらいの貯金もして、となったら、わず

ておけない」

夫は朝食もそこそこに探しに飛び出した。県庁はまだ開いていないから、時間を見はからって途中で連絡を入れるという。夫は県庁職員である。定時出勤定時帰宅の典型みたいな公務員だが、あの震災のときは過労で倒れるんじゃないかと思うくらい働いた。死者行方不明者、被災した土地建物が一番多かったのが宮城県だ。その職員だから、手が足りなくて困っている一番ひどいところを選んで回された。ガソリンもなかったのだから、家から通うなんてできない。一度出たら何日も出っぱなし。あのときはみんなそうだった。

ガソリンが買えるようになっても早朝出勤、残業は当たり前、帰ってこない夜もあった。土曜日曜も出勤した。

ああいう緊急時は誰が何の仕事なんて言っていられない。土建屋まがいのことから病院の手伝い、交通処理、離れた所にある避難所の入所者管理まで、回された先で、何でもやっていったようだ。

被災した誰がどこにいるか、なんてことも、しばらくわかりようがなかった。震災後三週間ばかりして、石巻市の病院で、知っている名前を見かけたのだそうだ。とにかく惨状、テレビや新聞で報じられているニュースとはまるで違う。テレビの画像なんかで伝えられるのは事実のほんの何分の一かだ。いくら想像力をたくましくしてみたって、

かな養育費など簡単に足が出てしまう。それなのにこの子は、養育費が目当てで引き取ったとも思っているのか。

どれだけ大変かわかってんの。短期間ならいざ知らず、家族以外の誰かに、デンと居座られてごらんなさいよ。同じ部屋で呼吸されてりゃネコにだってイライラする。まして人の子供。だけど、そう言ったらおしまいだから、お互い我慢できるところは我慢して、わたしの方が年上だからわたしの方がたくさん我慢して、なるべく良い関係を作りましょうと思ってるのに。

ひっぱたいたこと自体は誓めたことではないが、一回だっただけでも抑えたと思う。祐介がいなくなったのは翌朝だった。海斗の携帯がなくなっているのに気付いたのは、さらにそのあと。学校に持ってゆこうとしたが、見当たらなかった。

たまたま朝食に下りてきた洋子が、探してあげると言っていて、自分の携帯から海斗の携帯に電話してみた。呼び出し音が鳴れば、どこにあるかわかる。しばらく待っていたが、鳴らなかった。かわりに出たのが祐介だった。

「なんだ、祐介なの。どこにいるのよ」と洋子が頓狂な声を出したら、「家へ帰る」と言って切ってしまった。夫が顔色を変えて立ち上がった。

「要するにガキなんだよ。手元の携帯が鳴ったから、盗んできたのも忘れてつい出てしまった。そういうガキを放っ

テレビや新聞でわかることなどタカが知れている。

想像をはるかに超えた惨状を毎日目の前にして、夫の神経も普段とは違っていった。思い出したくない名前だ、なんて言っていられない。当たって見たらやはり伯母だった。喧嘩別れ、というか親の仇、しかも出会ったのは数十年ぶり。相手は八十を越えていた。震災後薬が手に入りになくなって容態が悪化したものの、気力で持ちこたえていた。

名前を告げたら思い出して、思い出したとたん涙をポロポロ流してすがりついてきたという。石をぶつけるようにして郷里から追い出された、なんて話は、もちろんしなかった。夫はそのとき持っていたお金を渡し、住所と電話番号を教えて別れた。

亡くなったと連絡が来たのは、それから十日ほど後である。病院の関係者に、夫の名前をくどいくらい繰り返していたそうだ。彼女は入院していて助かったが、息子夫婦とその長男が津波の犠牲になった。もう一人孫がいて、彼女は孫が心配で死ぬに死ねなかったらしいのだ。それが祐介だった。

彼女だって、津波がなかったら死なずにすんでいただろう。入院先の病院が津波でやられ、別の病院に搬送された。カルテは流され、薬も十分ない。夫の伯母のような間接的犠牲者も多い。

「すまない。麻実には面倒かけるかもしれないが、おれが



育てるしかないようだから」

郷里のことは全く忘れてと言いながら、夫は最初の子供が生まれると洋子と名付けた。太平洋の洋である。二番目の子は海斗。心の中では海を忘れられなかった。そういう夫と暮らしてきたのだから、仕方がなかった。麻実だって、それなりに覚悟は決めたのだ。

「休みがよくよく残ってないんだ。おれより大変な奴でも、無理して仕事には出てるんだから」

伯母の一家だけでなく、寒川在住の親戚全員のことを夫が調べねばならなかった。震災以降、職員が休暇を取るのには極端に難しくなっていた。安否確認から始まって死んだ者には死亡手続き、全壊した家には撤去手続き、半壊ならばボランティア申込み、さらに葬儀や瓦礫の片付けなど、公の業務として出来ないところは、取りにくい休暇を無理に取って個人でやるしかなかった。おまけに今日も休んでいる。言われなくたって、夫の公休はもうほとんどない。

次の日、麻実は不安な道を自分で運転して寒川へ行った。石巻河南インターまでは三陸自動車道、下りてしばらく県道を走り、やがて国道398号になった。県道から国道に変わる近くには、今回の津波で大惨事を呈した大川小学校がある。今まで大きな津波なんか来たこともない土地だった。海も見えないし、その小学校自体が何かあった場

道路はでこぼこ穴だらけ、ところどころ舗装のコンクリートが剥がれている。道路の一部になったコンクリートが剥がれるほどの波の力だ。建物から壁や柱もぎ取られ、でも、不思議はなかった。

集落をひとつ通るたびに、体から力が削ぎ落ちてゆく気がした。土地に馴染みのない自分でもそうなのだから、生まれ育った祐介はどんなだろうと思う。こんな風景を見ながら自転車をこいでいる小学生を思い浮かべると、たかが携帯で叱った自分が情けなくなる。

寒川も酷かった。港が大きかったから町場も賑やかで、学校や郵便局や民宿や大きな店があった。それが、ひとつもなくなっている。夫の生家、つまり祐介の生家は雑貨屋を兼ねた古くからの網元で、付近の草分け的な一族だ。祐介だって、それなりにいいところの坊ちゃんだった。

ほとんどの建物がなくなってしまった集落は、いやにちんまりと小さく見えた。少し高台にある小学校の校舎が、ガラスがなくなった窓をさらして、残骸のように残っていた。

夫が昨日頼んでおいたという集会所や派出所へ行ってみたが、目新しいことはなかった。

夫に探せなかったものが麻実を探せるとも思えなかったが、とりあえず寒川の港に座って、一日海でも見ているしかなかった。こういうものは相手が出てこようと思わない

合の緊急避難所に指定されていた。二時四十六分に大地震が来たが、その後津波に襲われるなんて誰も考えていなかった。まして先生方は土地っ子ではない。

先生に引率された子供たちが動き出したときはすでに遅くて、津波が北上川を一気に遡った。船や車や建物を巻き込んだ黒い水が、音を立てて川を上ってくる。いくら走っても追いつかれ、児童の七割が死亡、助かった先生は一人だけだった。

五カ月過ぎた今も、北上川の反対側に、鉄骨を剥き出しにして校舎が立っている。さらに進むと石巻市の北上総合支所で、赤錆びた高い鉄骨の間から壁材がビラビラと風に泳いでいた。まだ建設されて間もない新しい建物で、ここも付近の指定避難所だった。想定された最大の津波が五・五メートル、それに万一の用心分を加えて海抜六・五メートルの場所に建てられた。おまけに目の前には高い堤防がある。津波はその堤防を越えてなだれ込み、最新の設備を備えた総合支所は一瞬で廃墟に変わった。生存者は三人だけだった。

支所の後ろに中学校の校舎が残っていた。こちらも骨だけだが、手前にあつた総合支所の建物に遮られて、津波の勢いが少し弱まった。こちらに避難した人たちは、三階に逃げて助かった者が多いという。どちらの建物に逃げたかで生死が分かれた。

かぎり、探せないものだ。だいいち祐介は寒川に着いたのかどうか。「家へ帰る」と言っていたって、家そのものが流されているのは、祐介だって十分に知っているだろう。山と山の間に開けた静かできれいな集落だったが、集落全部がなくなっている。もとの姿とは似ても似つかない。

夜、家へ戻ったら留守電が入っていた。同じクラスのPTA役員である吉沢さんからだった。夏休みが終わって二週間になる。小学校はそろそろ学芸会の準備に入り、PTA役員も手伝うことになっていた。この後たびたび寒川へ出かけることになるから、あまり手伝えないと断りを入れておく必要があった。

「家の子から聞いたんだけど、昨日も一昨日も、祐介くん、欠席だったんですってね。それで電話してみたんだけど」

留守にしていたことを謝ろうとしたら、吉沢さんの方から言った。PTA役員は各クラス二人ずつだから、役員同士自然に親しくなる。祐介を引き取るようになった経緯は吉沢さんには話していた。祐介が無口なだけに、吉沢さんが教えてくれる学校での出来事は貴重だった。

「祐介くん、喧嘩したんだってよ」

「喧嘩？」

「転校生に殴られたんだって。一発軽く殴られたらしいん



「ただどね、殴られた量に不釣り合いなくらいいっぱい殴り返したって。それで大喧嘩になって、誰かが職員室の先生を呼びに行つて、ようやく収まったんですつて。相手の子、鼻血出して、制服が血だらけになつちやうたかつた。」

麻実は溜息をついた。厄介な子供ではあるけれど、今までは喧嘩してきたことはなかった。それとも麻実が知らなかっただけなのか。

「先に手を出したのは、相手の子の方なのね」

「まあ、そうなんだけどねえ」

吉沢さんの話は歯切れが悪かった。二学期が始まって間もなく、福島県の飯館村から転校してきた子供だそうだが。ここ半年は小学校も中学校も転校生が多く、クラスに転校生が三、四人いるところも珍しくない。転校生を異分子として、排除して面白がるのも珍しいことではなかった。その子供が転校してくるまでは、祐介が転校生と呼ばれてきた。

原発から避難してきた子供だった。父親は仕事があるの飯館村に残り、母親と小学生の子供二人が仙台のアパートで暮らしている。転校生がやってきたとき、先生は彼の境遇をみんなに説明し、仲良くするよう言った。だが間もなく原発菌とかいう遊びがはやり出した。その転校生の手が触れたところを「ゲンパツキン、ゲンパツキン」とはや

すのだそうだ。

麻実は眉をしかめた。そういうの、最低だと思う。

「止める子供、いなかったの？」

「はやされる子つて特徴あるのよね。大きな声じゃ言えないけど、なんかのろくさくて、福島県の元の学校にいたつていじめられそうなタイプ」

「うちの祐介がいじめた、つてわけなの？」

「そうでもないみたい。そういうこと、中心になってやっていたがる子つて、いるじゃない。尻馬に乗って騒ぐ子と、中心になってやりたがる子。祐介くんはどっちでもなくて、ただそばで見ただけみたいなの。それなのに、その子いきなり祐介くん殴りかかっただけだ。で、祐介くんも殴つて、あとは手が付けられなくなったんですつて」

どうもよくわからない。教えてくれた吉沢さんにしたつて、子供から聞いたことを話しているだけだ。どんくさいと思われていた子が、いきなり別な子供を殴つたから、怒らせるのと怖い奴だとあたりから見直された。だが翌日から祐介が学校へ行かなくなった。気にしたのか、その転校生も祐介が休んだ次の日から行かなくなってしまった。と言つても、まだ三日目だけだ。

先生も心配しているらしい。祐介については先生にも話してある。祐介にしろ、福島県の飯館村の子供にしろ、震災の傷を抱えた子供をどう扱うかは、学校としても大きな問

題なのだ。先生が話すよりも吉沢さんから話してもらつた方がいいと、先生は判断したらしい。

ああ、それにしても、と麻実は溜息をついた。話がどんどん大きくなる。携帯くらい、買ってやるべきなのかもしれない。麻実世代の携帯と、祐介世代の携帯とでは、必要度合がまるで違うのかもしれない。一般の町場の子供には好ましくない、ということが、壊滅した海辺から来た子供にも当てはまるものかどうか。

吉沢さんの電話が終わつて、麻実は祐介に電話をかけた。考えてみれば、祐介が海斗の携帯を持ち出したのは良いことだった。祐介と連絡が取れる唯一の方法が携帯だった。

「あなた今どこにいるの。叱らないから教えて。家へ帰ると言っていたから、昨日も今日も寒川へ行ったのよ」

相手が出た。確認もせずに麻実は一気に言い、言つたたん電話が切れた。

「もしもし、もしもし……」

どこにもつながっていない携帯を握つて、麻実はしばらくじっとしていた。

翌日も早朝から寒川へ行った。泊まりがけで探そうにも現地には泊まれる場所なんてないから、毎日仙台の家に戻つてくるよりない。

麻実は船着き場だったところにしゃがみこんで海を見ていた。何気なくすくつた砂が、指の間からサラサラこぼれ落ちた。あれから半年もたっていないのに、コンクリの上に砂は溜まる、というのが、妙におかしい。

白い波頭が風に光った。かもめが舞う。青い空、青い海、白い雲。腹が立つほどきれいで、おだやかだ。「静かな海」とタイトルをつけたら、そっくり観光用絵葉書として通用するのではないかと思うほど静かで美しい。

だが振り返れば壊滅した町だ。はじめてこの浜に来たときから見たら、ずいぶん片付いてはいる。だがそれだけだ。片付いたように見えるのは、瓦礫が一箇所にまとめられただけ。住む家を失った人々は遠くへ行つてしまった。

あのときはまだ中学校の校舎が避難所になっていた。高台にあった小学校はやられたが、もっと高いところにあった中学校は無事だった。迎えに行つたとき祐介もそこで暮らしていた。今は避難所は閉鎖され、本来の中学の授業がなされている。もっとも校舎の補修は継続中で、生徒もだいぶ減ってしまった。遠くの仮設住宅に引越した中学生は、以前の倍以上の時間をかけて通つてくる。峠を越えて臨時のスクールバスが走っていた。

あのとき避難所というところに初めて入つた。入つてゆくと同時に何かを期待するような目が一斉に突き刺さり、すぐにそらされた。無気力ともエネルギーもつかない

い異様な雰囲気だった。臭いでもない、人の動きのなさでもない、無気力とエネルギーシユではまるで違うのに、極端と極端が隣り合って、息をひそめているような息苦しきだった。

「津波の瞬間のことを夢に見るみたいで、ときどき夜中に大声をあげるんですよ。昼間は気丈にしていますが、夢まではセーブしきれない。すぐ前が海だからね。見たくないっただって、見ないで暮らすなんて出来ないんです。これが祐介の全財産。支援助資でもらった服とか靴とかあるから、けっこう持つてるでしょ。あ、このシユラフも支援助資。あつちの受け付けで退所の手続きしてってください。そんな、祐介、叔父さん叔母さんの言うこと聞いて、真面目に勉強すんだぞ。おまえが真面目に勉強することが、死んだ父ちゃん母ちゃんに、一番の供養なんだから」

避難所のもとも役役だとかいう初老の男が早口で言った。他の人の迷惑になっていきます、とは言わなかったが、言外に感じられた。

夫と石巻の病院で伯母の死を確認し、その後すぐに病院から告げられた寒川の避難所へ行った。広い体育館の半分ほどは毛布が敷いてある。マット運動に使うマットを敷いている人はまだ良い方だ。毛布一枚分が一人の生活スペースで、服やらタオルやら茶碗やらが、頭のところを整然と重ねてあった。これでも人数はかなり減ったのだ、と、ま

の。全部水没して水の中。港から離れた町場まで、和賀屋も食堂も郵便局も全部。

初めは向こうの民宿だけは見えたのしゃ。民宿の伊藤屋、あそこ三階建てで、しかも高台だから、山まで走るの間に合わない人が、何人もそこへ走りこむのが見えた。ただけど次の瞬間、そういう人たち、みんな見えなくなった。真っ黒い水が伊藤屋の屋上にもかぶさっていったんだから。さつきまでいた保育所も湖みたくなつて、子供迎えに来た人たちの車が、次々浮き上がって流されてくの。車どうしぶつかってガソリンこぼれて、別な車は人が乗ったままま沈んでしゃ……」

近くにいた人が喋っていた。話し出すと止まらないのか、唇の端に泡を浮かせ、声をつまらせて一気に喋る。目が定まっていなかった。結局その孫は助からなかった。誰にでも同じことを話すのだそうだ。この人の頭の中はまだ三月十一日のままなのかと思つたら、怖かった。津波で流されたという壊れた車が、避難所からも、いたるところに見えた。

「祐介、こつち来い」

まとも役さんが呼んだが、祐介は動かなかった。麻実は立ち上がって近付いた。どうしたらいいかわからなかった。ただ抱き締めた。ぎゅっと力を入れると、骨がないようにぐにぐに揺れた。自分の骨で自分の体を支える

とめ役さんは言った。

祐介は毛布の上に広げたシユラフに、膝を抱えてぼうつと座っていた。最後の身寄りだった祖母が昨日死んだ、ということがわかってしまつたような目だった。何人かの人が集まつてきた。親戚ならば面倒見るのが当たり前、と頭から決めてかかっているようで、考えさせてくれ、なんて言える雰囲気ではなかった。というより、どういうわけか、考えさせてくれ、なんて言おうと思わなかった。あんまり凄まじい風景を見て、麻実の神経も普通でなくなつていたのだと思う。

「わたし、孫んとこ迎えに保育所へ行つたの。孫と手つないで、ひよつと見たら、岬の先つちよにあつた高い堤防が、真っ黒い波に呑み込まれてんのしゃ。カキ剥き場とか倉庫とか並んでるあたりでは、至る所で噴水みたく水が噴き出してた。そのうち一気に水かさが増して、そこいらの人みんな、とにかく、どこでもいいから高いところ向けて走つてくの。わたしも、ここでは駄目だと思つて、孫の手つかんで学校の裏山に逃げたわさ。石の階段駆け上がった途上にも、バギバギバギバギって気味悪い音が聞こえてくんのよ。石段のちよつと平らになつてるところで、孫がころびそうになつて『ばあちゃん、ばあちゃん』って呼ぶからね。振り返つたら、浜近くにあつた建物、何も見えない

ものだ、などということも、忘れてるように見えた。髪の毛の臭いがした。風呂に入っていないのだ。

「このまま連れて帰ります」

夫が言った。

「責任持つて育てます。うちに子供、二人いるんです。二人も三人も同じようなものだから」

よかつた、よかつたと言つた。そのうち祐介の担任だつたという先生まで来て「よかつた」を連発する。面倒みてやらねばならないのが一人減つてよかつた。おかしな声を出すのがいなくなつてよかつた。うつとしいのが減つてよかつた。

みんな不親切だつたわけではない。自分があんまり重たいものを抱えているから、ほんのちよつとでも軽くなりたいのだ。余分な重みが加わつたら、加わつた重みごと沈んでしまふようになっていく。麻実もうなずいた。夫以外の身内が本当にいないのか、なんてことを考える余裕はなかった。

立たせようとしたが祐介は立てなかった。夫が抱えるようにして何とか立たせ、危なっかしい足取りで車の方へ連れてゆくのを見ながら、麻実は大急ぎで祐介の荷物をまとめた。

学校の先生だという人が丁寧に頭を下げた。

「よろしく願います。ほんとは素直な良い子なんです

よ。これで祐介のことは安心できます」

安心できない子供は他に何人もいるらしかった。震災のあった三月十一日は小学校の卒業式で、全校午前中でおしまいだった。当時五年生だった祐介も帰宅していた。地震で家の中がメチャメチャになり、その興奮が冷めないうちに大津波警報だ。祐介は母親と一緒に逃げた。海ぎわにそり立った巨大な黒い壁が音を立てて崩れ、水しぶきをあげて流れ込んでくる。高いところ高いところ、細くて急な道を必死で走った。だが普段の道と地震直後の道はまるで違う。地割れができ、浮き玉や枯れ枝が散乱している道は、速くは走れない。

追ってくる水がすぐ後ろに見えた。公民館の裏あたりで追いつかれそうになり、母親はそばの松の木に祐介を押し上げた。今どきの子供は木登りに慣れていない。一番下の枝につかまり、もつと登ろうとしている間に波が来た。

V字に入り込んだ陸の形に沿って、水が火のようにめらめら駆け上がった。風に煽られた火事の火が、ふれるすべてのものを片端から焼き尽くすのに似ていた。木も家も船もトラックも通り筋でぶつかつたすべてを呑み込んで、バギバギツバギツと音をたてながら、濁流になって陸を上ってきた。呑み込まれたものが水圧で潰される音だった。見る間に水は、祐介が登っていた松の木のところまで来た。波しぶきが頭からかぶさつた。下から支えていた母親

の手が離れた。真っ黒い水が母親を絡め取った。

「その手、絶対離すんじゃないよ」

それが祐介の聞いた母親の最後の声だった。祐介はそれからのことはよく覚えていない。大きな津波は三度来た。山の上でかろうじて一夜を過ごした人が、水が引いた朝になって下りてきたとき、木にしがみついて失神している祐介を見つけた。薄い粉雪が降っていた。凍死してもおかしくない状態だった。

数日後、母親は遺体で発見された。片腕がなかったそう

だ。「ちよつとでも上へ、一センチでも上へ、子供をとにかく押し上げなければならぬ、必死だったんでしよう。腕が伸びきっていて、そこを津波でやられた」

麻実は絶句した。生身の体から腕をちぎり取るほど強い波の力というものが、想像できなかった。だが先生は首を振った。津波の死で一番多いのは溺死だけれど、打撲死も少なくないそうだ。水が壁のようにそそりたつたのだから、崩れる激しさだって大変なものだ。

「遺体なんて見られたものじゃないですよ。水を吸ってばんばんに膨らんだり、紫色の痣で体の半分が埋まつてたり。手足が付いてないのだからある。一人の人が二人に数えられて、別々に葬式出された例だってあるんですから。私の親戚でも……」

その「あのとき」が、同じ県内なのに、五カ月の間に、寒川と仙台とは大きく違ってしまっていた。

胴体から脚がもぎとられ、それぞれが違う場所で発見された。遺族はどんな姿でも遺体が見つかってほしいと思っているから、脚だけだつて見つからないよりはいい。偶然見つかった脚を身内だと思つて葬式を出した。損傷した遺体について、先生は「こんなこともあった」としか言わなかった。自分のよく知つた人だから、一般論としてしか話せないのだ。瓦礫の下から発見された遺体がこの誰かを確認するのに、遺族でさえも着衣や歯形を見ないとわからなかった。服の中からスポツと抜けて裸になった遺体は、もつとひどい。遺族の気持ちが思われて、具体的なこととはとても口に出せないのだ。

祐介の父と兄は海で別々に見つかった。発見された場所が海ということだけで、亡くなったのがどこなのかはわからない。

祐介が特別なものではなかった。家族全員を一度に失つた者こそ少なかったが、親を亡くした子供や子供を亡くした親はそれこそどこにでもいたのだ。「亡くなった」とわかるだけでもマシなくらいだった。

石巻だけではない。岩手、宮城、福島、海に面しているところ、ほとんど余すところなくそうだった。

洋子も海斗も、新しい兄弟を黙って受け入れた。子供たちだつて、あのときはただごとではないと感じていた。あのときは。

携帯の電池はすぐになくなる。祐介が充電に困るかもしれないという心配はあつたが、朝晩二度くらいならかまわないだろう。答があるうとなかろうと、呼びかけているしかなかつた。少し話すと相手は黙つて切つてしまう。麻実からだを知つていて、少なくとも初めの教言は聞いているのだ。それだけでも良しとしなければならぬ。

「どこにいるの。帰つておいで。帰れないくらい遠くへ行ってしまったんなら、せめて寒川の港で待つてよ」

祐介がいなくなつて六日目の朝、麻実はいつものように電話にささやいた。返事があるなどと思つていなかった。

しかし相手が出た。まるで知らない、落ち着いた男の声である。

「こちら、松島交番です」

「え？」

麻実の戸惑いを察したように、男は手短かに説明した。国道45号線沿い、松島町の交番だそうだ。昨日、遺失物として届けられたという。拾つた場所は近所のコンビニ、届けたのは高校生の女の子。コンビニの前に落ちていたのを見つけて、何気なくカバンに入れた。部活の時間があつて

急いでいたそうだ。帰りに届けようと思ったのだが、部活に熱中しているうちに忘れてしまった。思い出したのは翌日で、それから届けたいけれど、拾ってから丸一日が過ぎていた。

「拾ったというところ……じゃ、あの子、捨てたんでしょうか？わたしの電話がうるさくて、捨ててしまったんでしょか？」

思わず叫んでいた。叫ぶと同時に、寒川の壊滅した町が頭の中にバツと広がった。思い出すまいとしても、いやでも思い出される。あれだけのものを見てきた子だ。神経が少しくらいおかしくなっても不思議じゃない。携帯が欲しいなんて、やっぱり口実だ。なんでもいい、誰かに突っかかりでもしないと、どうしていいかわからないのだ。突っかかって、自分の方を向かせておいて、あげくに煩わしいとか、ほっといてくれとか、自分で自分を扱いかねている。八つ当たりする相手だって、いないよりはいた方がいいだろう。親にはなれなくとも、八つ当たりを受け止めてやるくらいは出来る。

「落としたんじゃないですか。拾われた場所が場所ですから。捨てたのと落としたのでは、だいぶ違いますよ」

電話の向こうで、おまわりさんはおだやかに言った。そうかもしれない、と麻実も思った。捨てたのではなく落としたのだとしたら、祐介はもっと困っているだろう。「これから行きます。交通渋滞に引っかけなければ一時

のも小さいのも通れそうな道を全部調べ、再開したコンビニや、子供が一休みできそうな場所も教えてくれた。寒川の小学校はもうないが、別な学校に間借りして授業が行われていた。もともとが小さな小学校だから、先生方は担任でなくても児童についてはおおよそ知っている。できれば先生にも頼んでおきましょう、とも。先生の一人くらいに連絡がつけば、あとは先生どうしで連絡を回してくれる。先生方は地域とくっついているから、別の土地に移ったにしても、地域の人については案外詳しい。ついでに、もと寒川在住で今もときどきは寒川に行っている人がいたら、そういう子供に気を付けてもらえるように頼んでおきましょう。

「この携帯、こちらで預かっておいた方がいいですよ。ね。落としたとすれば、困って探すかもしれないし、気の利いた子供だったら交番に行くかもしれない。ここまで来なくたって、交番ならどこでも遺失物は取り扱います」

おまわりさんが言った。この交番は、寒川と仙台の麻実の家の、距離にすれば三分の一くらいだ。ここまで四日だったら、最大限かかってあと七、八日。もしかしたら明日にでもつかまえられるかもしれない。麻実は何度も何度も頭を下げた。おまわりさんから後光が差しているように思えた。

聞くらいで行けるかと思えます」

待っています、とおまわりさんは答えてくれた。麻実はすぐに車を飛ばした。国道沿いの目立つ交番だった。すぐにわかった。

交番に届けられたのが昨日で、拾われたのが一昨日。祐介がこの道を通ったのは、仙台を出て四日後ということなのだろうか。車だったら一時間前後の道を、祐介は迷い迷い四日かけてここまで来たのだろうか。九月初めで、暑いのが幸いだった。どこで寝たのかは知らないが、シユラフがあればそう困ることはなかったらう。

しかし四日は長すぎる。

「いや、落としたその日に、すぐ拾われたとは限りませんから。何日も誰にも気付かれなかったということもあり得る」

おまわりさんは言い、麻実の目の前で携帯を開いて、発信履歴を調べた。家を出てから四日の間に祐介がかけた電話だ。意外に少ない。電話番号なんて、メモしておかなかったらすぐ忘れる。忘れた番号が多いのか、震災以降変わっている番号が多いのか。ほとんどが石巻の市外局番だが、仙台のも一つあった。

おまわりさんは麻実の話を聞いていねいに聞き、そういうことだったら途中の交番の全部に連絡を取りましょうと言ってくれた。松島交番のあるところから寒川までの、大きい

麻実はその日も、次の日も、その次の日も寒川へ行った。数日はすぐに過ぎた。甘かった、と思いき知らされた。何日たっても祐介は現れない。親切なおまわりさんのいる交番へ何度か電話してみたが、交番でもわかったことはなかった。

仙台から石巻までの主要道路沿いは震災前の風景がほぼ復活したが、その先は三月十一日のままなのだ。知っている道を行ってきた祐介は、石巻の中心部を過ぎたときとたん異次元に入り込んでしまったのかもしれない。まるで知らない道を、あっちへ行ったりこっちへ行ったりしているうちにますますわからなくなる。夫も、時間の都合のつくかぎり探し回った。おもな道だけでなく、おまわりさんから教わった小さな裏道も探した。携帯の発信履歴をメモしてきていたので、それを手掛かりに聞いてもみた。だがどこを探してもわからない。祐介は異次元へ吸い込まれたように、ポツと消えてしまった。

しばらくは熱心に寒川通いを続けていたが、麻実も、あまりの手応えのなさに疲れきった。

分厚い学簿は湿ってカビがはえていた。変哲もない黒い厚表紙に、薄い紙が貼つてある。「大正元年〜同十五年」



とくろうじて読める。麻実はまだ文書修復のボランティアに通い始めた。

表紙と、それに続くページが一番汚れている。薄い和紙が表紙にくっついてなかなか剥がれない。一度津波をかぶった文書は、時間がたつてもきれいに乾くということがなかった。

湿った学籍簿は不用意に扱うともっと破けてしまいそうだった。こびりついた泥を刷毛と竹ペラで洗いぬいでこそげ落とす。泥といっても乾いたヘドロである。なかなか落ちない泥を落とせる分だけ落とし、エタノールで殺菌して次のページに移る。

今朝出て来たなら、段ボール箱が廊下にドンと積み上げられていた。麻実が休んでいた数日の間にも、新しい被災文書が運び込まれていた。北上川の流域だけでも際限なくありそうだった。

「麻実さん、それ終わったら、こつちを手伝って欲しいんだけど」

結城さんが声をかけてきた。結城さんは古文書も読める。麻実と違って頻繁に通ってきているから、仕事も手早くてきれいだ。

「ごめん。これ、もうちょっと掛かりそうなの」

「いつまで掛かっているのよ。丁寧すぎるんじゃない」

「だって……」

たかかわからない。イライラしているよりは、時間さえかければ確実に終わる文書修復のほうがずっとよかった。人の役に立っている、という充足感もある。

「今日の午後、また古文書が来るんですって。今度のは民家から出た掛け軸がメインだって」

「やっとな減ったと思ったのにね」

「なくなくなったと思うと、新しく入ってくるんだから。いつまでかかるんだろ」

「博物館にも美術館にも、スペースのあるところみんな、被災資料、被災民具、とにかく集まっているらしいわ」

結城さんたちが向こうの方で話している。聞くともなく聞きながら、麻実は無言と手だけを動かしている。そう、仙台って集まりやすいところなのだと改めて思う。

地元で手に負えない被災文書類はとりあえず仙台に運ばれる。岩手・宮城・福島は大惨事で、三県からの人の流出は膨大だったが、仙台の人口は増えた。被災した人、仕事をなくした人、行き場を失った人たちが、とりあえず仙台へ集まるのだ。仙台は東北地方の宮城県の中にあるから、仙台で踏ん張っているかぎり郷里からすっきり切れてしまうことはないと思っていられる。三陸のリアスの浜で家族を亡くした小学生も、原発で住むところを失った飯館の母親も。いや麻実の夫みたいな、郷里から石で追われた一昔前の男たちだって。

欄外に押印して「一文字訂正」などと几帳面な文字で書いてあると、手が止まってしまふ。これを書いた人は一文字でも大事にしていたのに、肝心の本文が流れて読めない。紙はそのままあるのに、文字だけが剥がれて流れてしまった。書かれた文字が、物が流れるように流れるなんて、考えたこともなかった。

ガリ版もなかったころの学校文書はとても丁寧だ。細かな文字で一人一人の子供についてびっしり書き込まれているのを見ると、先生たちが子供をどんなふうに使っていたかが感じられて、適当に済ますなんてできない。

たぶん今の先生たちだって同じだろう。たくさんの他人の子供を親身になって世話した人がいる、それもおびただしい数で。田舎の小学校訓導、などという人たちが、さほど給料を取っていたとは思えなかった。ほとんど無名のおびただしい訓導たちが、たまたま自分が受け持ったもつとおびただしい子供たちと、かけがえない関係を結んでいた。その関係の結び方が、文書に記された文字だ。たった一人の子供を持って余している麻実には、とんでもなく貴重なものに感じられる。

麻実は初心者だから、慣れていない分だけ時間がかかる。でもボランティアだから、能率が上がらないのが悪い、なんて文句は言われない。

何かしてないと落ち着けなかった。祐介はどこへ行くか。どうして飯館から来た転校生は、そばで見ただけの祐介に殴りかかったのか。そうして祐介は、殴られたのが一発だけなのに、どうしてそんなに滅茶苦茶に殴りつけたのか。

仙台というのは集まりやすい街だ。被災地の文書が集まり、ツアアのボランティアだつてとりあえず仙台に集まり、それから各地に散る。人が集まり、物が集まり、情報が集まり、哀しみが集まり、失望が集まり、嫉妬が集まり、イライラが集まる。飯館の転校生は祐介が宮城の被災者だから殴ったのかもしれない。同じ被災地でも、宮城はとりあえず一段落したけれど、原発の災害は先が見えない。祐介は、殴った相手が、被災者ではあつても両親がちゃんといふことにカッとしたのかもしれない。

そういうことばかり思っていたら、味気なさ過ぎて、ひからびてしまふ。携帯くらい買ってあげるから。うちの子じゃなくてもいいから。「おかあさん」と呼べないのなら、呼ばなくたっていいから。夫は明日も明後日も寒川へ行って欲しいような口ぶりだったが、空振りとなわかっていて毎日通うのは辛かった。

九月もそろそろ終わりにさしかかっていた。祐介が出ていったときは暑かったのに、もう上着が欲しい季節だ。三週間近く過ぎようとしている。アイツはどうしているのだ

ろう。お金だって、残っているとは思えなかった。

祐介は本当に寒川へ行ったのか、と、ふと思った。携帯が届けられたのが松島だ。考えてみれば、仙台から松島まで四日かかった、ということからしておかしい。親切なおまわりさんがいた松島の交番まで、仙台から二十数キロだ。いくら小学生だって、いくら自転車だって、仙台から松島まで四日もかかるということが、あるだろうか。

行く途中で落としたのではなく、もしかしたら帰り道で落としたのかもしれない。どこかへ行行って、戻ってくる途中だった。そう考えれば、四日というのは納得できる。寒川まで行って戻ったとは思えないから、途中のどこか、たとえば石巻市街地を過ぎた北東あたりでUターンすれば、ちょうど合う日数だった。

風景がいきなり異次元に変わっているのは寒川ばかりではない。三月十一日のまま時間が止まってしまった土地は、仙台を中心に思い浮かべてみても、恐ろしいほどどこにもあった。それこそ、どこにでも。

それらの風景の一つに出会って、祐介は、足がすくんでそれ以上は行けなくなったのかもしれない。進めなかったら戻るしかない。しかし、どこへ。

麻実は改めて、携帯の発信履歴の中に仙台の市外局番があったことを思い出した。二度ほどかけてみたが誰も出なかった。三度めにかけたとき、くたびれた声の女の人が出

たので、ほとんど外に出っぱなし。子供の友達関係もよく知らない。気にしないというより、子供の話をゆっくり聞いている時間もないという。

「とにかくお金がないんですよ。主人からの仕送りだって、あの人の仕事がうまくゆかなくなったものだから、こっちに送るほどないし。パートとパートをつないで走り回ります。おかげで転校先の先生にもご無沙汰しっぱなしで」

村田さんはくたびれた声でいった。福島県の飯館から転校してきた母子だった。小六の息子と小三の娘がいるそうだ。

「じゃ、しばらく前に祐介と喧嘩したというのは……」

「え？」

そういうことも村田さんは知らなかった。子供たちが転校先の学校でどんな生活を送っているかなんて、最初の一週間くらいは心配だったけれど、その後は気にしたことがない。気にしない、というより、一日一日を暮らしてゆくのに手一杯で、ほかのことまで気が回らない。細いレールの上を、足を踏みはずさないようにバランスを取って、ようやく歩いているようなものだ。

ある日、仕事を終えて家に帰ると、朝に用意していったはずの冷蔵庫のおかずがなくなっていた。子供たちに聞いてみたら、息子が、友達が来て、おなかがすいていたので食べさせたと答えた。その子供は、村田さんがいない時間

で、そういう子供は知らないと言った。他の番号ははかばかしい結果がなかったから、初めからあんまり期待していなかった。突っ込んで尋ねてみる気にもなれず、そのまま電話を切ってしまった。

だがもしかして——こちらの聞き方が悪かったのかもしれない。いきなり「武山祐介を知りませんか」なんて言われたら、相手だって戸惑ったかもしれない。急に思い付いてハッとした。夜も遅かった。よく知らない家に電話するのに適当な時間を過ぎていたけれど、かまっていられなかった。この前の女の人が出た。やっぱり疲れた声をしていった。

「村田です」

相手は名乗った。麻実は以前にも電話した者だが、と前置きして、自分と祐介の関係を手短かに説明し、祐介のような子供を本当に知らないのかと聞いた。何でもいいから思い出して欲しい。少なくとも祐介の方ではお宅の電話番号を知っていた。どこかで会ったことはないか、あなたが知らなくても子供さんは知っているかもしれない、お宅に子供さんはいないのか。早口で尋ねた。電話の向こうで相手は首を傾げたらしかった。

少し時間を置いて、村田さんは考え考え息子のクラスメイトかもしれないと言った。村田さんは昼間は働いていて家にいない。二重にパートを掛け持ちしないと暮らせない帯にその後もたびたび来ているようだった。ごはんを食べたり、泊まっていたりすることもあった。留守中に自分の子供がよその子供にごはんを食べさせるのは、あまり気分のいいものではない。でもこの辺はそういうことが自然でない土地柄なのかと、気にすることもなかった。

「その子供、名前を呼んだりしなかったんでしょか」

「さあ、わたしが会ったことは、ほとんどないもので。泊まった朝なんかでも、わたしは子供たちが寝ている間に働きに出てしまうんで、顔は合わせません。津波でおうち流された子だよ、と言っていました。とても親しい口ぶりでした。その友達が来るようになって、うちの子もいくらか元気になりました。わたし知らなかったんですが、うちの子、学校もたびたび休んでいたらしいんです。今も、必ずしも毎日行くなってわけじゃないんですが、前よりは行くようになったみたいで。わたしは忙しいけれど、そういう友達ができてよかったなと思ってました」

「祐介です！ いなくなつて、もう三週間もたつんです」

思わず叫んだ。ようやく見つけた。

「家は石巻のはずれのリアスの浜。でも家なんかありません。家に帰るって出ていったもので、生家のあったあたりばかり探してました」

一息で言った。村田茂くん、というそうだ。祐介も茂くんも被災者だった。クラスのみんなはとうの昔に日常を取

り戻したけれど、いまだに異次元の世界から足を引き抜けない。日常そのものみたいな教室に座っていると、場違いなうそ寒さがひしひし迫ってくる。そういう子供が、やはり自分と同じうそ寒さを抱えている子供を本能的に嗅ぎとった。

「牛を飼っていたんですよ。茂も牛好きで、自分から進んで世話していたんです。でも原発の避難指示でしょ。みんな強引に退去させられました。飼い主がいなくなった牛が、おなかをすかして舗装道路をふらふら歩いているのニュースで見てから、口をきかなくなっちゃってね。人が住まない土地って、荒れるの速いです。山ですから、津波なんて関係ないですよ。地震だって大したことありませんでした。でも家の屋根まで草はボウボウ、置き去りにされた犬や鶏が大通りをフワフワ歩いてる」

仙台近郊の荒浜の海岸は、あのととき逃げ切れなかった人の死骸が二百も三百もころがっていた。

「祐介はどこにいるんでしょう。すぐ迎えに行きます」

興奮して、口の中が乾いた。村田さんの家に行っていないとき、祐介はどこで寝ているのだろう。

「知りませんよ。だけど、いいじゃないですか。そのあたりにいるんでしょうから」

「そのあたり、たって……そんな無責任な……」

「放っておけばいいんです。わたしは放っておいてます。」

った。見ただけで住んでいる人の経済状態がわかってしまいうつな、つましいアパートだった。車をアパートの前に止めて、おそるおそる急な階段を登った。

チャイムを押したら、出てきたのは長い髪を垂らした女の子だった。ドアに手をかけたまま、こちらをじろじろ見ている。TシャツにGパン、服装のわりにはおとなしそうな感じだ。

「しおりちゃんね？」

尋ねると、こくんとうなずいた。夕べ村田さんから聞いていた。玄関の端に大きなゴミ袋があつて、ビニールの間からカップ麺の空が見えた。

「おかあさん、いないの？」

またうなずく。

「おにいちゃんは何？」

しおりちゃんは黙って首を振った。午後の四時ころだった。小学六年生が学校から戻るか戻らないか、微妙な時間帯だ。学校と自分の世界を行き来している子供たちが、境目を飛び越してどこかへ飛んでいってしまう時間帯。しおりちゃんだって、どこかへ飛んでゆく途中かもしれないかった。祐介の叔母だと名乗ったら、眉の間がピクッと痙攣した。祐介を知っているのだ。

「ごめん。叱りに来たわけじゃないのよ。しばらく前にいなくなっちゃって、心配していたの。うちの子だもの。う

放っておくしかありませんから。子供が学校へ行かなくて、学校で喧嘩してきたって、いいじゃありませんか。

大人が必死で生きていけば、子供だって必死にならざるを得ない。必死になって学校行かないで、必死になって家出して。子供なんて案外強いものですよ。お宅のお子さんだって、自転車こいで石巻往復してきたんでしょ。無茶だけどね。そういう無茶できるの、子供だからじゃないですか。どこもかしこも廃墟になってしまいました。死んだ親は戻ってこない、いくら尽くしたって叔母さんは母親にならない。子供の心の中だって廃墟になってる。でも放っておけば、廃墟にも草ははえるし、虫だって集まってくるじゃないですか。それでなくなっちゃって忙しいんですよ、放っておくしかないんです」

村田さんは疲れた声で笑った。半分かすれた、小さな声だったけれど、何となくほっとした。心の中に詰まっていた重苦しさが、ほんの少し引いたような気がした。

翌日、小学生が学校から帰る時間を見はからって、村田さんのアパートへ行った。朝早く駆けつけたかったのだが、好ましくないような気がした。

聞いた住所を頼りにアパートを探した。学区内とはいってもはずれに近い、細い道がやたら入り組んだ狭い路地だ。ちの子がいなくなったら、誰だって心配するでしょう。ずうっと探してたのよ。元気してるなら、それでいいの。あちこち探したんだけど見つからなくてね。しおりちゃんのおにいちゃんなら知ってるんじゃないかと思って、来てみたの」

戸を閉められる前に一気に言った。女の子は表情を変えずにこちらをうかがっている。髪が垂れ下がって目が半分しか見えなかった。

「祐介がいるところ、もしかして、しおりちゃん知らないかしら。知っていたら教えて。うちの大事な子なの」

ドアノブに手をかけたまま女の子は何も言わない。ずいぶん長い時間過ぎたような気がした。やがてしおりちゃんはどうもうなずき、玄関に脱ぎ捨ててあった靴をはいて外に出てきた。

「おうち」

「え？」

「おうちにいるの」

「おうちって、遠いの？」

しおりちゃんは首を振った。平屋の間に低いアパートがところどころにある郊外だった。今でも付近に畑が多いのは、古くからの近郊農村だったせいだ。田んぼは少なくなつたけれど、豆や葉ものを植えた畑があちこちにある。畑を食い潰して住宅が侵出していた。

駐車場の柵の破れ目をくぐったり、崩れた土手を上ったりして、しおりちゃんは黙って歩いた。麻実も黙ってついていった。こぎれいに住みならされた家の間に、スキが数本風に揺れていた。舗装道路の隙間にはネコジャラシがはえていた。

だいたい歩いたところ、しおりちゃんは立ち止まって顎でしゃくった。

建築資材置き場にも、小さな古い公園にも見えた。工場でも建てるつもりで工事を始めたものの、途中でやめて資材を置きっぱなしにしてあるような小さな広場だ。

敷地の隅にすべり台が残っていて、脚のところにも資材が積まれていた。その資材に腰掛けて、男の子が二人、空を見上げていた。話をするでもなく、何かするでもなく、ただ肩と肩をくっつけて空を見ている。見覚えのある銀色の自転車が進まっていた。

祐介、と呼びかけようとしたが、声が喉の奥に引っかかってうまく出てこない。二人が腰掛けている資材の近くに、板や石で囲って、人が入れるくらいの窪みができていた。青いビニールシートで屋根までかけてある。なるほど、「おうち」に見えなくもなかった。

しおりちゃんは麻実のそばを離れて、ゆっくりと二人に近寄った。二人が腰掛けている資材の端が少し空いていた。その空いているところに、黙って腰をおろす。茂くんも祐

介も当たり前前みたいに体を詰めて、しおりちゃんが座れる場所を作った。三人とも何も言わない。

あたりは暗くなり始めていた。曇った空のせいで、午後四時という時間よりもずっと暗かった。ここまでは住宅もきていない。建てかけて途中でやめた土台や、敷地のあちこちに放り出された建築資材が、津波で流された建物の痕みたいな、暗い空にさむざむと浮いている。まだ色付かないセイタカアワダチソウの群れが、風に揺れる。

どこかで波の音がしていた。海面から波が湧いて、リズムを取りながら動いているような規則正しい音だ。聞いているうちにも音はだんだん大きくなって、公園の隅からも壊れたぶらんこの下からも聞こえ出した。

いや波の音ではない。草むらで虫が鳴いているのだ。気付いてみると、セイタカアワダチソウはそこいら一面に群れていた。小さな広場の全部がアワダチソウで埋められ、アワダチソウの隙間に資材が置かれている。公園の柵の向こうにも、さらに向こうの荒れた畑にもアワダチソウの群れは続き、群れたアワダチソウのあらゆる根元で、コオロギが鳴いているのだ。

麻実の足元でも鳴いている。足の先から頭に向かって、リーリーと音が一気に駆け上った。虫の声は、またたく間に広場全部を埋めつくした。後ろのアワダチソウがザワザワ立ち上がった気がした。風の吹くままに端の方から頭を

下げ、また起きあがる丈高い草の群れは、迫ってくる黒い水のようにだ。

三人はいま瓦礫に腰掛け、廃墟の中で海を見ているのかもしれない。なんとということもなく涙が出た。近寄ることも声を掛けることもできずに、麻実は三人の子供たちをただじっと見つめた。聖なるものを照らすように、宵の明星がぼうつと空に光っていた。

参考 宮城資料ネット・ニュース

(NPO法人 宮城歴史資料保全ネットワーク)

(「仙台文学」79号より転載)



佐佐木邦子

くさき さ

- 1949 仙台市生まれ  
宮城教育大学卒  
医療事務管理士、塾講師、タウン誌編集、  
レストラン経営などを経て、現在は私大非常勤講師
- 82 NHK 仙台放送局ラジオドラマコンクール最優秀賞(シナリオ)
- 85「卵」で第11回中央公論新人賞を受賞(同作品で芥川賞候補)
- 2002 宮城県芸術選奨受賞  
仙台文学同人 日本民話の会会員  
みやぎ民話の会会員



# 仙台文学

宮城県

## 純粋な文学雑誌を

「仙台文学」の創刊は昭和三十九年（1964）一月なので、東京オリンピック開催の年である。この誌名での同人誌は、既に戦前に発行されているが、その後を「東北文陣」を主宰していた工藤幸一が引き継ぐ形となり、さらに同氏が現在の「仙台文学」を発起したものである。その背景として、工藤が「全作家」（1981・8）の「同人雑誌文壇史（宮城県の巻）」に風土性が潜んでいることを指摘している。引用は長くなるので省くが、宮城県の文学の不毛性を三つの特徴で捉えている。①仙台藩六十二万石の封建制から脱却できなかったこと②東京との距離が縮まり、中央的色彩が濃くなったこと③東北帝国大学以来のアカデミズム支配が色濃く、庶民感覚を受け付けなかったこと、である。こうした中で「東北作家」「散文」「文芸東北」「現代東北」などの同人雑誌が声を上げ、「仙台文学」も加わるのである。

創刊号の編集後記には「文化都市と称する仙台に、純粋な意味での文学雑誌が見当たらないのが何となく寂しいと

いう感じをうずめることができるかどうか。わたしたちは旗幟鮮明な主義主張を用意しているわけではない」と、発刊の意図が記されている。意図といっても、強烈な自己主張ではない。

同人の一人は、テレビ放送会社の取締役で、同人誌発行当初の資金は全て同氏の援助によるものであった。したがって、同人たちは費用の心配をせずに執筆できたのは有難いことであった。もともと、同氏がまもなく病床に臥すこととなり、援助は打ち切られたのだが……なにしろ当時、どの同人雑誌発行にも共通していたと思われるが、印刷費用紙代等への負担がのしかかっていたのである。

発行間もない当時の状況を、「宮城県芸術年鑑」は「昨今の困難な情勢のなかで創作を続け、発行を絶やさないとそれ自体が、地方作家の情熱にかかっているのである。昭和三十九年一月に創刊された『仙台文学』の刊行は右の意味で、まことに宮城県ばかりか東北にとっても重要な役割を果たしている」と記した。

当初の同人は十三名。そのうち、創刊から携ってきたのは現在筆者一人になり、過半は物故してしまった。当時既に「南方移民村」で台湾文芸賞を受賞した濱田雄、 「お小人騒動」でオール読物新人賞を受賞し、その後「黒白」で直木賞候補にノミネートされた柳田知怒夫等がいた。初めて同人会に参加した若造の筆者には、近づきが

最後に、今は亡き工藤幸一が四十六号巻頭に記した「仙台文学とは」を転載してみる。

新鮮にして 重厚に  
美しくして 妥協せず  
花と小鳥と人間を  
真実性を 味方にし  
オリジナリティー磨くだけ  
そして書くだけ 作るだけ  
これが仙台文学

作品本位の 同人制  
みな同格の結びつき  
地方に深く 根をおろし  
見果てぬ文学 追いながら  
きょう一日を磨くだけ  
そして書くだけ 作るだけ  
これが仙台文学

### 仙台文学



79



（代表）牛島富美二

最後に、今は亡き工藤幸一が四十六号巻頭に記した「仙台文学とは」を転載してみる。

最後に、今は亡き工藤幸一が四十六号巻頭に記した「仙台文学とは」を転載してみる。

最後に、今は亡き工藤幸一が四十六号巻頭に記した「仙台文学とは」を転載してみる。

最後に、今は亡き工藤幸一が四十六号巻頭に記した「仙台文学とは」を転載してみる。

たい雰囲気漂っていた。

「地方的な存在価値と同人制の意義をはつきりさせていきたい」とも後記には記されたが、この創刊号の世評はどうであったか。地元の新聞「河北新報」は「最近の仙台文壇は加藤秀造の『凍った河』あたりを除いて沈滞ムードといわれるが、その意味で、純粋な文学雑誌をという旗印の仙台文学が誕生したことは期待される」と祝儀的な期待感と作品の寸評を試みている。「朝日新聞」は「なぜふえる同人誌（下）欄で『仙台文学』の創作が、こんどの創刊同人誌のなかでは、もっともすぐれていたが、私のねがう、天才的シロウトは発見できなかった。当然である。たとえば、大江健三郎のような天才的作家は、そうざらにはいるわけではない」と、小松伸六が評した。なんと大江に匹敵する作家が期待されていたのである……。ところでこの時期、「なぜふえる同人誌」との見出しが設けられたほど同人誌界が盛況であった。

現在の同人は十七名。中央公論新人賞受賞、同作品が芥川賞候補にノミネートされた佐佐木邦子も健在で、作品の合評会などでの意見が切磋琢磨の源になっている。掲載費は自己負担制なので発行上には問題ないが、ただ、同人の高齢化がやはり今後の運営に赤信号を点し始めているのは事実である。それでも、書きたいものを書きたい時に書きたいだけ書く、という意欲で支えあっている現状である。

仙台文学の会

〒981-3102

宮城県仙台市泉区向陽台四丁目三・二〇

牛島富美二方

☎022・372・7891

## マーサの足音

紺野夏子

バスタブの蛇口を捻る。勢いよく流れ出した水はすぐに熱を帯び、適温に設定した湯が満ちる間、真弓は寢室の椅子に座り、読みかけの本を開く。

二ページほど読み進んだ頃、浴室の壁からかすかな兆しを訪れる。一瞬でも気を逸らせば取り逃がすような、音になる前の気泡のような空気の揺らぎ。待ち受けたその気配に、真弓は本を閉じ立ち上がる。浴室に入る。予想通り、お湯はバスタブの三分の一ほどに達している。服を脱ぎ、お湯に足先を浸す。体を沈める。お湯は真弓の脚とお尻を温めながら高を上げる。バスタブの背に凭れ、目を瞑る。石壁の奥で始まった兆しは、待ち受けた知らせをのせて

やってくる郵便配達自転車のように、リズムカルに近づく音になって真弓の鼓膜を叩く。今日もマーサの足取りは確かだ。

胃の辺りまでせり上がったお湯が震え出す。

カン、カン、カン、カン、カン……。

いらっしやい、マーサ。

真弓の口元に笑みが浮かぶ。

今日も変わりなくやって来たわたしのルームメイト。

マーサの足音は、今や四方の壁を共鳴版にして、浴室内の空気を揺さぶり真弓の肌を打つ。

相変わらずあなたの足音は威勢が良い。とても八十を越

したおばあさんとは思えない。銀色の長い髪をくるくると器用に巻いて大きなヘアピンで留め、長く暗い冬の間、暖炉の前で編み続けたストールを、少し猫背の背中にかけている。先年亡くなった夫や、成人して独立していった子供たちの着古したセーターをほどこき、とりどりの色の毛糸を編み込んだ、思い出も色合いもたっぷり詰まった、重くて暖かいストール。踝までの長いスカート。硬い皮の靴。色は黒……いや、褪せた茶色。その頑丈な靴で石壁を踏み鳴らし、黄泉の国からマーサはやってくる。マーサの脚はとも丈夫だ。出会ってから九年近く経つが、決して衰えない。もう死んでいるのだから、これ以上歳を取ることはない。

くなくなった所を修理し室内を好きなように改装して、根気強く住み続ける。ましてこの家は石で出来ているのだから、真弓が死んだ後もずっと残るに違いない。

お湯が満ちた。蛇口を捻る。マーサが遠ざかる。真弓は石鹸を泡立て体を洗う。髪を洗う。シャワーを出す。再びマーサが近づく。真弓はマーサの足音と戯れながら全身の泡を流していく。

体を洗い終わりに、バスタブの栓を開けてお湯を落とす。泡を洗い流し、シャワーの蛇口を堅く閉める。マーサは溜息に似た柔らかな振動音を残して去っていく。

おやすみなさい、マーサ。

あなたのいる黄泉の国は、暖かい闇の中なのでしょう。か。それとも敬虔なキリスト教の信者らしく、光り輝いているのでしょうか。私はどちらかというところのほうが見れるけれど、マーサは、どう？

……どちらでも。

そう。死んでいるのだからねえ。明るかろうと暗かろうと、眠りの深さには関係ないでしょう。それほど大らかになれるものなら、死ぬのも悪くはないかもしれない。この世に未練を残さずに死ねるものなら。

わたしには、まだ未練がある。

透と結城。ふたりの男たち。一人は十二年前に死んだ夫で、一人は九年前に知り合った、わたしの相棒。

その結城が、間もなくやってくる。入浴はその前の儀式のようなもの。だからと言って、いまさら肌を合わせるはずもないのだけれど。今は軽い挨拶のキス。今日は日本に帰国していた結城の、二ヵ月ぶりの訪れだ。いつもより念入りに体を洗い、仄かなジャスミンの香りを着る。

結城が好きな緑色のワンピースを着て、真弓は居間へ向かう。壁に穿たれた暖炉の上の、小さな染付けの壺を取る。大きめのボタンほどの蓋を指先で摘んで開ける。壺の底に白い欠片が五つ。透の骨は、いつの間にかこれだけになってしまった。両手で包めるくらいは壺だが、初めに納めたときには中ほどまで骨はあった。

当時、イラクへ侵攻した米軍への爆弾テロは西欧社会へ広がっていき、中東からの移住者の多いロンドンでもその危険性は高まっていた。シティーの通りに停まった車に仕掛けられた爆弾の巻き添えで、透は死んだ。爆弾で吹き飛ばされた透の体のほんの一部が見つかった。

真弓に残された両掌で掬い上げられるほどの透の骨。その余りの少なさにうちのめされた。それが透の体のどこの骨なのか細かく砕けて見当もつかないような、犬や猫の骨と見間違いそうな頼りない遺骨。これは違う。野球が好きで背が高くて、長い腕で真弓をがっしりと抱きとめてくれた透の体が、こんなになるはずがない。真弓は首を振り、ちがう、ちがうと、呪文のように繰り返した。

うとしている。間もなく透の骨が消えてしまう。

もうわすれなさい。マーサは言っている。いいえ、わすれることなど出来ない。真弓は首を振る。わすれたくない、わすれてはならないのですと真弓はしがみつく。日本人は未練がましいとマーサは笑う。あんなアジアのモンスーン気候の土地に住むと、人間もやたらに湿っぽくなるのねえと、顔じゅうの皺を震わせて笑う。だから日本人は、遺体を焼いてカラカラの骨だけにしてしまう。大急ぎで自分の中の未練まで一緒に焼き尽くす。いくら思い出の涙で濡らしても、高温のガスの炎で焼いた骨はすぐに乾いてしまう。本当に日本人のやることは抜かりがないわ。熱々の骨はよく冷まして、さっさとお墓に納めて、一件落着。あなたのようにいつまでも傍に置いておくのは罰当たりのはず……。

真弓は壺の蓋を閉じて、マーサの言葉を封じ込める。うるさいおばあさん。生きているときもこんなにお喋りだったの？ だから、大人になった子供たちから敬遠されて、寂しい一人暮らしを続けていたのでしょう。きつとそうよ。

真弓は暖炉に壺を置く。しばらくそこで、静かにしていいから。

ベルの音が真弓の体を突き上げるように鳴った。ようやく結城がやってきた。真弓の鼓動は高鳴る。

僕の体を見つけてほしいと、透は夜毎真弓の夢で泣いた。その透に伝えて、石の鎧で覆われたこの街の通りを捜し歩いたが、透の体は戻らなかつた。堅い石畳で履きつぶした靴が、今もクローゼットの奥にある。捨てようと思いつながら、決心のつかないままに、悲しみの化石のように冷たく固まってしまった。それから十二年が経つ。

透は今、残されたわずかの骨まで消えようとしている。なぜなのだろう。

……マーサが食べてしまったのだ。真弓が住む前にこの家の主だったマーサ。長い間一人暮らしをしていたおばあさん。亡くなって間もなく売りに出されたこの家を真弓が買った。不動産屋に案内されてこの家を訪れたとき、そのおばあさんが真弓の前に現れた。

あなたを待っていましたよ、ここでお暮らしなさい……深い皺の奥から滲み出すような笑顔が今でもはつきり浮かぶ。

すぐにこの家を買おうと決めた。

もしかしたら、透が知っていることを知って、おばあさんは真弓を呼んだのかもしれない。きつとそうだ。真弓の傍にいる透に気付いて、現れたに違いない。真弓はおばあさんをマーサと呼ぶことにした。本当の名前は知らない。知る必要もない。

そのマーサが、透の骨を黄泉の国へ持っていつてしまお

この国のベルは、どのように柔らかに押ししても、心臓が飛び上がるほどの激しさで丸い銀色の鉦を激しく打ち鳴らす。新式のチャイムにしたらと結城は度々言うが、これもマーサの置き土産なのだ。そう簡単には変えられない。

マーサはきつと耳が遠かつたのだろう。いずれ真弓も年老いて、優しい音では気づかなくなるかもしれない。そのときのためにそのままに……。

真弓は近頃、マーサがいつそう近づいたと感じる。足音がないときも、マーサの気配が明かりの届かない部屋の隅に不意に現れる。懐かしい闇が真弓をあたためる。そこにいるのね、マーサ。真弓は安らいで眠りに落ちる。

ひと月ぶりの結城は少し膨らんでいた。柔らかな脂肪が長身の体を覆って、鋭かった輪郭がぼやけている。崩れ始めた男の体から差し伸べられた両腕に、真弓は迷わず体を預けた。

途端に黒い海が広がった。白い波が岩に砕け散る。ああ、日本の海だ。そう思った途端、目の前が暗くなり、結城の胸に倒れこんだ。

気が付くとベッドに寝ていた。結城が医者らしい仕事で真弓の脈を取っている。

「気がついたね」

「ええ。どうしたのかしら、わたし」



「さて……、両手を出してみて」

結城は、差し出した真弓の手を注意深く見た後、両目の下脛を下ろした。

「貧血だろう。ちゃんと食べていなかったんじゃないか。

一人になると食事をしなくなるのは、君の悪いくせだ」

「つい忘れるの。朝起きて何となく時間が経って、気が付くと周りが暗くなっている。ああ、今日も一日スープだけだったと、そのとき思うの。それほど体を動かさないから、お腹が空かないだけ」

「本ばかり読んでいるんだろう。物思いしながら。死んだマーサと遊ぶのは、ほどほどにしないと、本当に向こうへ連れて行かれてしまうよ」

「そんなこと、マーサはしないわ」

「ほうら、やっぱり思ったとおりだ。マーサの話になるとむきになる」

当たり前のようにマーサと呼ぶ結城に、真弓はおかしさがこみ上げる。お湯を大量に使うと決まって壁の中の配管が鳴りだし、一年がかりの家の改装工事が手抜きだったと落胆したが、念入りな点検を思いつく限りの手当てをしても音は鳴り止まず、工事業者は首を捻った。この家に心を残して死んだおばあさんのせいかもしれないという思いつきが真弓を捉え、耳障りな音は次第に親しい音になっていった。真弓の考えを結城は笑ったが、今では真弓が気ま

ぐれに名付けた名前を古い知り合いのように口にす。

「それより、あなたの胸に日本が見えたの。暗い海が、ザブンと飛沫をあげていたのよ」

結城は、思い出すように少し黙った。

「……だとしたら、富山の海だろう。お墓参りに行って、気がすむまで海を見てきたから。思っていたより、明るかったよ。天気が良かったからだろうが、目に染みるような濃い青だった」

真弓はゆっくり上体を起こす。もう目は回らない。

「良い旅をしてきたのね。それで、どうだったの、検査の結果は」

「癌ではなかったよ」

さらりと結城は口にした。なかった……。ほとんど諦めかけていた答えを、真弓はゆっくり体に沁みこませた。それから、言った。

「ほかには。何もなければいいわね」

「肝臓が硬くなっている。これは日本に行かなくても分かっていただけだね。心臓も少し弱っている。煙草も酒も止められたよ。飲んだら死ぬと言われた」

「やめるの」

「いや。そのつもりはない」

「昔のローマ人のように、ワインを水で薄めましょうか」

「冗談だろう。俺の舌はそんなに安っぽくはない。それよ

り、美味しい富山の米を炊いてやるよ。待っていないさい」

結城は玄関に置いたままの旅行カバンを取りに行った。

三年ぶりの日本は、結城に優しかったらしい。真弓は結城の背中を見送りながら思った。透の死から一度も日本へ帰っていない真弓には、とても遠い国になってしまった。

さっきの衝撃を思い出しながら、真弓は少し憂鬱になる。

どんなに遠くなくても、日本が祖国であることには違いがない。その祖国に嫌われているのだろうか。

富山の米は美味しかった。

「おいしいわ」

真弓はそれ以外の言葉が出ない。おかずは、海苔と卵とお味噌汁。真空パックで空を飛んできた、鮎の甘露煮も出た。久しぶりにおかわりをした。体が温まり、頬に血の色がさしているのがわかった。少なくとも、日本の食べ物には嫌われていない。まだ大丈夫。

結城は前もって『日本アルプスの水』を送り届けていた。

いくらお米が良くても、石灰質のこの国の水で炊いたら台無しになる。こちらの日本人は、当然のように料理の水に気を遣う。

「本当にぜいたくなご飯だったわ。ありがとう。こんなご飯を毎日食べたら、肥るはずよね」

「ああ。おれでも太るんだって、鏡を見て驚いたよ。だからと言うわけではないが、適当なところで帰ってきた。川

本はしきりに、日本で治療しろと言ってくれたけれどね」

結城の親友だった川本は、そのまま大学に残り、母校の内科教授になっている。学生時代は決して成績は良くなくて、他の大学の女子学生と合コンばかりやっていたそうだ。そのとき知り合った美人と結婚したが、その奥さんは三人の子供を産み、今ではすぐには誰かわからないくらい貫禄がついて、川本は尻に敷かれっぱなしだった。病院にいるときと家にいるときとまるで様子が違うと、結城は愉快そうに話した。

「あれが、日本式幸せなんだろうね」

結城は微妙な顔をした。

「……遙さんのお墓には参ったの」

真弓は、二十年前に死んだ結城の婚約者の名を言った。結城の幼馴染だった遙とは親同士が決めた相手だった。決して嫌いではなかったが、素直に従うのは抵抗があった。

若い結城は反発心で、当て付けるように遊んだ。一人娘で我が儘に育った遙は聡明で感受性が鋭く、若い結城は魅力を感じながらも持て余していた。幼い頃から慣れ親しんだ相手に対する甘えもあった。ある日、遙は結城のアルバイトで自殺した。それ以来、結城は独身を通している。

「それが、行ってみたらお墓がなくなっていたんだ。新聞記者をしている彼女の弟が、ニューヨークへ赴任する前にお墓の整理をして行ったそうだ。両親も亡くなっている



ね。その永代供養塔というのが、すごかった。金色の塔の載った丸いコンクリートの建物の正面に立つと、見上げるような黒い扉が音もなく開き、七色の光がどこからか差し込んでお経が流れます。金ピカの仏像が部屋の真ん中にある、大きな線香が焚かれている。その仏像の近く辺りが一番高く、離れるとだんだん安くなっていくらしい。彼女の場所は中くらいで、百万円と言っていた」

「聞いたの、そんなこと」  
「ああ、案内の坊主に少し話を向けると、べらべらと喋ったよ。まだ空きはごさいますだつてさ。もみてをするように数珠の掛かった両手をこすり合わせていた。日本はどうかしている」

「ずいぶんさばっているのね。わたしの知っている日本とはだいぶ違っている」

「ああ。行くたびにどこかが変わって、疲れる街さ、東京は。まだ富山の方がましだが、もう誰もいないし、つくづく居場所がないと思ひ知らされたよ。川本は帰って来いと云ってくれたが」

「友情は変わらなかったのね」

「ぼくが病気だからさ。このままだと、かなり深刻になると脅かす。最後は自分の国で死ぬよと言わけてさ」

「シャブリをひと口含んだ結城は、ショートピースを出し火をつけた。きつと大量に買いこんできたのだろう。」

い邸宅からも、爛熟の果ての腐敗のにおいがした。街は息苦しい重い空気に満ち、二人の泊まるホテルの部屋にも、ほの暗い死の気配が忍び寄っていた。この街は死者の街だった。

結城と真弓は、灰色の水に覆われた街を眺めながら、その部屋に籠り続けた。天蓋から流れ落ちる紗のカーテンの中で、二人は結婚したばかりの夫婦のように交わった。甘く痺れるような腐臭は、媚薬になって二人の性欲を煽った。真弓は透を結城は遙を抱いた。四人の魂は激しく求め合い、溶解し、天上の高みへ駆け上がり、底知れない闇へ墮ちていった。数多の貴族の眠りを抱いたという優雅なベッドでは、何百年という時の間に沢山の男女が交わり死んでいっただろう。その人々の列に二人も確かに加わった。迎え入れられたのだと感じたとき、腐敗した水は懐かしい故郷の水に変わった。

この街に帰ると、結城は医者に、真弓は娼婦に戻った。あれほど二人を煽った性欲は消え、長年連れ添った夫婦のような親密さだけが残った。沢山の秘密を共有する、誰よりも信頼できる同士に戻った。

今は老いた夫婦のように穏やかにキスを交わす。出会いと別れの挨拶の、神聖な儀式のようなキス。それだけで満たされている。

その夜、結城は二階の和室に泊まった。マーサは遠ざか

「まだ先の話だよ。太るほど食欲はあるし、当分死なない」  
黙り込んだ真弓に向かい、笑顔を作ったが、結城の前のご飯はほとんど減らないまま冷えていく。

真弓は戸棚から灰皿を取り出し、結城の前に置いた。縁の丸いクリスタルグラスの灰皿は、昨年ふたりで行ったベネチアで手に入れたものだ。有名なムラノ島まで出向いて買った。黒地に赤や緑の色彩が鮮やかで、日本の夏空に咲く花火を思わせた。この灰皿を手に取りながら、長い間、本当の花火を見ていないと思った。この国では冬に花火をする。昔、火炙りの刑で処刑された伝説の男の命日に、毎年甲いの花火を打ち上げる。透と二人で海を渡ってきた初めての冬に、灰色の空に打ち上がる濁った煙を見て、これが花火かと驚いた。あるとき思わず握った透の手の温もりが、今も真弓の掌に残っている。

そのときベネチアは大雨の降った後で、サン・マルコ広場は水没し、人々は膝下まで水に浸かりながら往来していた。広場だけではなく、ベネチアの街は海に沈みかけていた。みな驚く様子もなく、足元を水浸しにしながら陽気に往来していたが、結城と真弓はその陽気さに交われず、異邦人の眼差しでこの街を覆う不吉な水を見ていた。街のいたるところに崩壊の兆しが見えた。この街は日々、死に近づいていた。古い街に張り付いた静脈のように縦横に走る運河からも、その両側に立ち並ぶ、足元が水没している古

り、真弓は階上で眠る結城の体温を感じながら、深く眠った。七時に目覚め、朝食の用意をした。久しぶりの熟睡を得た体は羽を持ったように軽く真弓の心は弾んだ。昨日の残りのご飯で作った雑炊を、結城は全身で味わうようにゆつくりと食べた。たつぷりのお椀に盛った具沢山の雑炊を残さず平らげた。真弓は空のお椀を見て、声をあげて笑った。この家を支配しようとする死者たちへの、勝鬨のような笑いだった。

仕事へ出かける結城は両腕を真弓の背に回し、いつもより長めのキスをした。一日中温かな体で、真弓は掃除や洗濯を済ませ、きちんと食事もとった。

結城がいなければ何も始まらないと、真弓は改めて思った。結城なしでは生きられない。

大野は真弓の一番古い客だ。大野との関わりが真弓をこの仕事に向かわせるきっかけになった。真弓の体の奥に潜んでいたものを目覚めさせてくれた恩人とも言えた。

そのときはわずか三週間の付き合いだったが、半年ほど前に突然電話があった。

……覚えてますか。

もちろんです。初めてのお客を忘れるはずがありません。八年ぶりですね。

……光栄です。あなたの噂は、こちらに来た同僚たちから

聞いていました。とても魅力的な人らしいが、バックに付いている男が怖いので簡単には会えないと言っていました。みな、あなたがどんな人か知りたがっていましたよ。無論、あなたとこのことを口外しないという約束は守りましたが。

真弓のエージェントである結城の目論みは、まだ十分に機能しているようだ。結城はやはり、かけがえのない相棒だと思ふ。

決して怖い人ではありませんが、わたしを守ってくれている人です。この仕事は危険なこともありますし、じつとベッドで待っていても良いお客は来てはくれませんもの。彼がいなければ、わたしはこのように仕事を続けられませんが。

……そのお客の中に、もう一度僕を加えてくれませんか。

母親の強力な手引きで、ようやく真弓の前に現れた頃の大野には想像できない大胆さだった。あれからの大野が過ごした年月を思った。有能な銀行員として確実に地位を上げているのだろう。真弓は思案するように、少し沈黙する。

……昨年、母が亡くなりました。その節はあなたに失礼なこともあったようですが、亡くなる前には感謝していました。僕もあなたのことを忘れたことはありません。子供も二人出来ました。男の子と女の子です……。

このままでは大野の家が途絶えます。悲鳴のような大野

あれから八年。間もなく四十になるうとする大野は、以前のやや神経質な細い声が落ち着いたバリトンに変わっていた。真弓は、大野の頬の辺りに付いた脂肪を想像した。あの肋骨の浮き出ていた胸も、少しは厚くなっただろうか。受話器から流れる大野の声を左耳に響かせながら、この声を直に聞いてみたいと思った。

大野は出張でひと月ほど滞在するという。真弓は年上の娼婦らしく、少し間を持たせながら、水曜の夜を指定した。

以前と変わらず正確な時間に訪れた大野は、ドアを開けた真弓に柔らかな笑顔を送った。懐かしさに思わず両手を差し出した真弓を、長い留守をしていた夫のようにどっしりと抱きとめた。頬が触れ合い、互いの呼吸が一つになる。八年の隔たりは一瞬にして消え去った。二階へ導こうとする真弓の体を大野はすくい上げ、ゆっくりと階段を上った。そのまま迷わず寝室のドアを開ける。驚く真弓に、一度このようにしたかったと大野は言った。教えられリードされてばかりで別れてしまい、きわめて不本意だった。男として不十分だという思いがずっとあった。いずれ再びあなたと交えたいと思っていた。その思いをようやく果たせる。

それは奥様になさらなければ。そのために、あなたを治療したのですから。

の母親の声が蘇る。透を亡くした後、混乱と絶望に我を忘れた真弓を支え続けてくれた透の上司。その上司との関係を娼婦と同じと決めつけた母親は、生身の女性とつき合えない一人息子の相手を真弓に強要した。あなたになら、簡単なこと……。勝手な言い分だったが、なりふり構わない母親の、「盲目の愛」に真弓は圧倒された。逆る母性の

迫力に押し流されるように要求を受け入れた。不思議に後悔はなかった。あの強力な母性の暴走を食い止めたのだから。もし、あのとき真弓が断れば、母親の滾り立つエネルギーは、結城や、今は日本の本社で重役をしている上司を巻き込み、どのような混乱を起こしたか知れない。この街の日本人社会は、一箇所に毒を落とすだけですぐ全体に回ってしまう、誰もが顔見知りの密度の濃い社会なのだ。

真弓は自分の体でそれを防いだ。それは犠牲というよりも、もっと積極的な行為だった。あの頃の真弓には何も失うものがなかった。生きる目的も、生きようとする意欲も何もかも。それほどわたしが必要ならば、会ってみようか。ふと、心が動いた。わかりました。お会いしましょう。微笑むように唇が弛んだ。

大野の息子と過した夜は、忘れもしない。透が死んでから消えていたこの世の色彩が、一気に蘇ったような感動があった。真弓の奥に潜んでいたものが、頭をもたげ姿を現した瞬間だった。

……妻には息子を与えました。大野の家の跡取りを無事につくることができた。それで十分です。

あとは言葉は無用とばかり、大野は行動を起こした。ゆっくりと真弓の服を剥ぎ、下着を取り、全裸になった真弓の前で大胆に服を脱ぎ捨てた。母親の過剰な愛にスポイルされて、骨格の露な薄い胴体から伸びた長い手足を持て余していた若者は、八年の間に充実した筋肉を纏い、均整の取れた肉体の男になっていた。週末は必ずホテルのプールで泳いでいるという。

完璧な仕事と健全な肉体。これが今の僕の全てです。ゴルフ焼けた褐色の頬を緩めた大野の股間では、性器が既に準備を整えている。貧弱な体の中心で荒れ狂うものを持て余し、不機嫌に立ち竦んでいた若者は、今、鍛えあげた腰で鋭い馴らしたそれを、真弓の前に誇った。すごいわ。立派になって。

もう、以前の僕ではないよ。大野は待ち望んでいた獲物をじつくりと味わうように、真弓の体に視線を這わせ、やがてふわりと肌を寄せた。

迷いのない自信に満ちた行為が続いた。経験を積んだ成熟した男の行為だった。真弓は大野のなすがままに果てていき、大野は満足の声をあげた。

次の週も、また次の週も、帰国するまで大野はやってきた。

大野の来訪を知った結城は、直接客を取るのにはルール違反だと眉を寄せた。

「あの大野さんなのよ。特別な人じゃない」

「それはそうだが、ルールはルールだ。君が教えなければいけないだろう。他の客への示しが見つからない」

「怖い男がついていると聞いているらしいわよ。それであなたの名前を出しそびれたの。でも、大丈夫よ。プライドの高い人だもの。あなたも知ってるはずよ。お金払いも良いし。あの傲慢さは母親譲りね……亡くなったらしいわ、あのお母さん」

「うん。昨年だったらしい。君には言っていないが。大野という名前は嫌な思い出だし、わざわざ言うこともないと思ってるね。まだ六十になったばかりだったらしい。あれほど激しい人だったのに、死ぬときは意外にあっさりだった。しかし、あの息子が自分から連絡してくるとは。ずいぶん大人になったものだ」

「ええ。驚いたわ。無事に結婚して子供も生まれて、もう、まともな性生活ができない、欲求不満の若者の面影はすっかりなくなっていたの。新鮮だったわ。圧倒されたし。わたしも楽しかった。思わず、お金は要らないと言いつうになつたわ。言わなかったけれど……自分の仕事の成果を存分に味わったと言えば良いのかしら……こんな嬉しいこと

ム入りの、まるやかな口当たりのスープ。わりと良い出来よ。いかが？」

目を開けた結城の瞳が和らいだ。  
久しぶりの日本で懐かしい郷里の味をたつぷり味わい、一回り太って帰ってきた結城は、週末に会うたびに玉ねぎの皮を剥くように痩せていき、すぐに以前の体重に戻った。こちらの料理には全く食欲が湧かない。すっかり舌が日本に戻ってしまった。こんなはずではなかったと、肩を落とす。

結城が訪れる日、真弓は電車で二駅向こうの日本シヨツプに行き、沢山の日本の食材を仕入れて夕食の準備をする。ご飯を炊き魚を焼き味噌汁や吸い物を作り、白和えやおひたしを小鉢に盛る。こちらに来たばかりの頃に比べて、今はずいぶん便利になり、豆腐や醤油は近くのスーパーでも買えるし、新鮮なイカも売っている。顔見知りになった魚コーナーの店員の若者は目敏く真弓を見つけ、スクイッド？ とウインクする。ア・ハーフパウンド・ブリーズ。真弓も声を張り上げる。イカの煮付けは結城の好物なのだ。

体の治療はちゃんとしているのかと聞くと、葉は飲んでると答えるが、週末には真弓と共にワインを飲む。量は減り、一本の白ワインを二人でゆつくりと楽しむ。不純物の多い赤ワインは肝臓に負担がかかる、すっきりとした上

はないでしょう？ 彼が帰ったあと、これまでのお客たちを一人一人尋ねてみようかと思つた。こんなに効果があるのなら、それを確かめたいと本気で思つたわ。もちろん実行はしなかつたけれど」

「ずいぶん熱心さだね。生憎だが、君の感動には付き合えないよ。きっかけがあれば、人間は変わる。特にセックスに関してはそうだろう。予想されたことだ。いまさら生娘みたいに頬を赤くして報告するほどのことかな。まあ、君はその治療の成果とやらをたつぷり味わえばいいさ。味わえるのは君なのだから。賞味期限が切れないうちにね」

「……ありがとうございます」  
気まずい沈黙が続いた。用意したワインは、栓も抜かないまま氷の中でいたずらに冷えていく。結城の好きな生ハムもチーズも柔らかな緑の野菜を盛り上げたサラダも、ヒーターの熱で生ぬるく干からびていく。やがて、結城はふつと息を吐き出した。ソファに背を預ける。

「……きょうは忙しくてね。これでも患者たちには良い医者だと思われている。疲れ過ぎてよく眠れない」  
結城は目を瞑る。血の気のない皮膚から澱んだ疲労が不吉な陽炎のように滲み出す。

真弓は我に返る。つまらない言い争いをしている場合ではない。

「かぼちゃのスープを作つたの。あなたの好きな生クリーム入りの、まるやかな口当たりのスープ。わりと良い出来よ。いかが？」  
目を開けた結城の瞳が和らいだ。  
久しぶりの日本で懐かしい郷里の味をたつぷり味わい、一回り太って帰ってきた結城は、週末に会うたびに玉ねぎの皮を剥くように痩せていき、すぐに以前の体重に戻った。こちらの料理には全く食欲が湧かない。すっかり舌が日本に戻ってしまった。こんなはずではなかったと、肩を落とす。

生き返るよ。君の料理のおかげで生き延びている。  
桃色に蘇った唇を綻ばせて言われると、真弓の全身に心地良い酔いがふわふわと巡る。君はもつと飲んだらいい、遠慮しないでと結城は言うが、もう十分、私も最近は何もなかったのよと糟糠の妻のように微笑む。

土曜日の午後、飢えた難民のように蒼ざめてやって来る結城は、日曜日の夜、生気を取り戻して街の中心部にあるフラットに帰って行く。せめて職場に弁当を届けられればと思うが、精神科医としての結城の表の顔には決して関われないのだった。

体調もあつて、結城は仕事を辞めたがつている。代わりに良い医者が見つかったら、すぐにでも辞められるのだからと言う。今回の帰国はその目的もあつたが、うまくいかなかったらしい。結城が仕事を辞めたら、この家で一緒に暮らして、毎日手料理を食べさせられる。真弓の心は弾んだ。そうなればもう少し肉付きがよくなるだろうし、肝臓の機能も回復するかもしれない。いや、きつとそうなる。仕事



が今の結城の体には一番良くない。やめるなら早いほうが良い。早く後任が見つかって欲しいと思う。

いよいよ、真弓も仕事を辞めるときが来たようだ。八年前にこの仕事を始めたときには、いったいお客はどれくらい来るものか、いつまで続くのか、何もわからなかった。結城のクリニックに大野の母親が訪れて、一人息子の不健康な性の問題を相談した。生身の女性とは付き合わずに、夜毎いかがわしいビデオばかりを見て、睡眠不足で仕事に明けける。これではいつ仕事でつまずくかもしれない……。結城は、お母さんより、ご本人が来るべきでしょう、しかし、息子さんはそのような商売をしている所に行けばすぐに解決します、ご本人にそうお話しくださいと答えた。

得体の知れない玄人に大事な息子を託すわけには行かない。思案気に診察室から出てきた母親は、クリニックで臨時の受付をしていた真弓に目をつけた。そこにいた真弓の事情を知る看護婦と話し合せていたらしい。その看護婦から真弓の電話番号を聞きだし、母親は強引に真弓の家に乗り込み、息子の相手をするよう強要した。真弓は透の事故の後、混乱の中で我を忘れて上司に救いを求めた。生きるために必死ですがりついた相手だったが、それがこの街の日本人社会の噂となり、真弓に集まった同情は瞬く間に反感に変わった。それからは日本人社会の外側で孤立した

この街で生きる道を見つけた。透の消えたこの街でちゃんと息ができる……。

やがて結城が折れた。

日本人だからといって、誰でも受け入れるのは危険だ。窓口になる人間が必要だろう。それは私以外にはいない。君の代理人になるよと、蒼ざめた結城は瞳の奥に暗い炎を揺らせた。

それから八年が経ち、この春真弓は四十歳になった。仕事を始めた頃は、結城が厳しく条件を付けた男たちのみを相手にしていても、いつも予約は一杯だったが、八年の間に少しずつ客は減っていった。

以前のからの馴染みが二人、隔週の月曜日と水曜日にやってくるが、その中の一人は間もなく帰国する。残る一人は海外暮らしが三年目に入り、ようやく暮らしに余裕が出てきたという。よく口の回る男で、日本語を喋りたさに来ていたような印象だったが、そろそろ潮時だと思っている。

ここまで長くやれるとは思っていなかった。訪れる客を待つだけの受身の仕事なのだし、真弓が受け取るお金は相場よりもずっと高額だ。窓口は狭く、料金は高く。それが大事だと結城は力説した。自分にそれほどの値打ちがあるのか不安だったが、結城の目論みは成功した。厳しい条件をクリアした特別な日本人だけを相手にする特別な女。真弓の暮らす、この「石の家」に迎える以上は、身元の確

まま、この石造りの家に引きこもって生きてきた。帰国していったその上司の奥さんの紹介で結城と知り合い、ようやく社会に戻り始めたときの出来事だった。

大野の母親の勢いに押し流されるようにその息子の相手をした後、ある決心をして真弓は結城に打ち明けた。予想通り結城は怒った。憤る結城の前に、真弓は落ち着いていた。不思議なほど冷静だった。わたしのために結城が怒ってくれている。それだけで十分だった。真弓は話した。これはわたしが引き寄せた運命だと感じている。大野の息子と一夜を共にして、透が死んでから初めて生きていたと実感できた。わたしにはもともとそのようなものがあるのだろう。あの看護婦も大野の母親もそれを見抜いて、真弓にこの話を持ち込んできたように感じる。息子と会った後、これは良い機会だと思えた。こんなわたしでも人の役に立てる。これで何とか生きていけると思った……。

懸命に思いを語る真弓に、結城は顔色を変えた。自己犠牲のつもりか。大昔の巫女でもあるまいに、時代錯誤もいい加減にしなさい。こみ上げる怒りに震える声で、搾り出すように結城は言ったが、真弓は怯まなかった。どのような罵声も覚悟の上だった。決して自分を貶めて言っているのではない。わたしにしかできないことだと思っている。わたしは大野の息子のような悩みを抱えた男たちを治してやりたい。それならばわたしにもやれると思う。ようやく

かな口の固い、切迫した事情を抱えている男でなければならなかった。日本を遠く離れたこの街で、高級なスーツに身を包んだエリート顔の下に、人知れない性の悩みを抱えている男たちは少なからずいた。結城はクリニックを通してその男たちを拘い上げ選別し、真弓の元へ送り込んだ。

この仕事が終るときがきた。ふっと体が軽くなった。思いがけない自分の反応に真弓は驚いた。わたしはこの仕事が嫌いだっただろうか。そんなはずはない。あれほど強硬な結城の反対にも揺るがない熱意で、この仕事を始めたのだ。わたしにはこれしか生きる道はないと思いついて懸命に勤めた。男たちは真弓の前で封じ込めた欲望を解放させ、満ち足りて帰って行った。不安と期待の交錯した緊張のときを、真弓は長い間練り返してきた。確かに以前よりも疲れが残ると感じてはいたし、客を迎える夜が来なければいいと思う日もたまにあるが、それでもまだ辞めようとは思わなかった。

体の線が崩れ始めたとき気づいたのは、三月ほど前だった。頻繁にエステに通い、入浴の後には香りの良いオイルをたっぷり塗り、ヨガを習い、体のケアには細心の注意を払っていたが、歳月は確実に真弓の体に跡を残していた。入浴の後、全身を映す鏡でいつものように注意深く体を点検した。体の凹凸の影がいつもより淡いように見え



た。全身が弛んで見えた。バスタの位置が少し下がっている。横を向くとお尻のラインが下がっていた。照明を弾く肌の輝きにも翳りが見えた。薄い皮膜のように衰えが全身を覆っていた。

あなたはいつまでも若い、甘く匂うこの肌が恋しくて夢に見る。決まりごとのように囁く男たちの言葉も、もう終りだと、鏡の前でしばらく呆然とした。

体調不良を理由に客を断り、家に閉じこもった。悩ましい日が続いた。結城が日本に帰っている間のことだった。食欲もなく、一日の終りに訪れるマーサの足音を相手に過した。

結城が戻り、長い付き合いの馴染み客だけを相手に、慣れた仕事を淡々とこなした。このようにして静かに終りを迎えれば良いと思っていた。

……誰かが服のボタンをはずしている。だめ。いまはしごとのじかんではないわ。いやよ。ねむっているの。やめて……

払いのけようとすると真弓の両手を、大きな手が鉄輪のように締め上げる。いたい。真弓はもがいてはずそうとするが、手首に巻きついた太い指はびくともしない。異臭が鼻を刺激する。目を開ける。誰かがいる。全身が強張り、声が出ない。

ばれやがって。

強烈な異臭を噴きつけて、男は真弓の中を動き回る。焼けるような痛みが腰に広がり喉を突き上げ、真弓は重く叩いた。

繰り返し頬を打たれ、遠ざかる意識の中で、真弓の脳裏にある物が光った。銀色に光る小さなもの。仕事を始めるときに結城が持ってきた、ある貴族の持ち物を模造して作られたという、掌に収まるほどのピストル。精緻な葡萄の彫り物で飾られた、弾を出せないおもちゃのピストル。もし危険を感じることがあったら役に立つだろうと、本気とも冗談とも知れない口ぶりで結城は、真弓の手に握らせた。二階の客用の寝室の、大きなダブルベッドの脇の小机の引き出しの奥に、今もひっそりとあるはずの銀色のピストル。一度も出す機会はなかった……あの、ピストル……。

遠くで誰かの足音がする。タン、タン、タン、タン。子供が階段を駆け下りるような明るい足音。タン！ 数段飛び降りたような激しい音に真弓は頭を上げる。首を振り、こじ開けるように重い瞼を開く。

マーサだ。少女のマーサが立っている。

……おきなさいマユミ。いつまでお湯につかっているの。わたしとじゃんけん遊びをするって、約束したじゃない。……いやよ。そんな約束してないわ。いまは眠いの。

おとなしくしろ。いうことをきけ。おとなしくすれば、いのちはたすけてやる。

喉の奥が詰まるような訛りの強い下町言葉が、真弓の喉を打つ。安物のスコッチを帯びた生温い息が顔に当たり、思わず真弓はのけぞる。首に男の手がかかった。息がでない。岩のように重い体が真弓の上にのしかかる。油染みた獣の臭いが激しく押し寄せる。苦しい。気が遠くなり、布を裂く音で意識が戻る。ざらついた男の手が、脚から太腿へ這い上がる。下着が剥ぎ取られた。男の脛毛が肌に痛い。真弓は自由になった両手で男の胸を押しした。鋼のような手が再び真弓の両手首を掴み、振りあげた。

おまえはしようふだろう。しっているぞ。にほんじんばかりあいてにしているらしいが、このくにでそんなことがゆるされるとおもっているのか。おたかくとまりやがって。はくじんのとおとこがどんなものかおしえてやる。

真弓の脚を押し広げ、男のものが侵入してきた。真弓はあまりの痛さに男の腕に噛みついた。吠えるような声が男の口から迸り、頬に激しい衝撃を受けた。

くそっ！ ていこうするな。せんそうもできない、にりゅうこくが。おれのせんゆうは、イラクであしをなくした。おんなをだけないからだになった。おまえたちは、よそのぐんたいにまもられて、のんびりいどなんかほりやがって。タマをぬかれたオカマぐんたいめ。いちにんまえにあ

真弓はゆるく首を振る。

……あなたは、ずっと、わたしを呼んでいたのに、わすれたの？ あなたの声が聞こえたから、わたしは来たのよ。さあ、おいでなさい。わたしと遊びましょう……。

いまはとても遊ぶ気になんかなれない。うるさいマーサ。真弓は、重い頭を揺らして浴槽の中に沈んだ全身を見る。体が桃色に染まっている。一番濃い色が、真弓の太腿の奥から糸を引き、浴槽に拡がる。

昨夜の記憶が蘇る。

……まだいきている……

寒気を覚え、浴槽の縁に手をかけ、湯から上がろうとするが、力が入らない。全身が痛い。体の奥に熱い鉛の塊を抱いているようだ。浴槽の縁から床に手を伸ばし、ようやくお湯から抜け出す。

ジャンケン、ジャンケン。

マーサの声が響く。浴槽の床を這い、じわじわと向きを変え、重い腕を上げて蛇口を締める。音が消えた。

小さく息を吐き、浴室から這い出る。手を伸ばしてバスタオルを取る。体を拭くとバスタオルが桃色に染まる。鏡に知らない顔が映った。一瞬混乱するが、打たれて腫れ上がった自分の顔だと気づいた。頬が熱い。頭痛が脈を打って押し寄せる。髪の毛がざざりと床に落ちた。目が腫れて見えない。壁を伝ってベッドへ辿り着く。また記憶が蘇り、

足が竦む。ここでは寝られない。掛け布団を体に巻きつけ、床に横たわった。太腿からお尻へぬるりと温かいものが動いていく。真弓は目を閉じた。

……磔のように弾ける音がする。澄んだ青空に響く沢山の鳥の声。裏庭のリンゴの木に鳥が群がり騒いでいる。リンゴの実をつついているのだ。毎年青いリンゴの実が生る季節に裏庭で練り広げられる賑やかな光景。それが今、始まった。今年こそは、あのリンゴでジャムを作ってみようと思っていたのに、また鳥に食べられてしまう。いけない。だめ。それはわたしのリンゴなのだ。

払いのけようとする真弓の手を柔らかな手が包んだ。

「気がついた？」

耳元にかかる温かい息と共に、ひっそりとした結城の声がか聞こえた。目を開けようとするが、何かが顔にのっついて開けられない。

「冷やしているんだ。ずいぶん腫れていたからね。まだ痛むかい？」

結城は真弓の顔の冷たい被いを取ってくれた。光が目にも痛い。真弓は軽く瞼を閉じて、言った。

「鳥が鳴いているわ。ずいぶん沢山。リンゴが食べられてしまう」

結城は少し笑った。

「あれは、もともとそんなリンゴだろう。人が食べるもの

じゃないよ」

「ジャムを作れない」

「ああ。いいじゃないか。それで鳥が喜ぶ。あれは、お礼の囁きだよ。真弓さんありがとって、鳴いている」

泣いている？ 結城の声の震えに、真弓は目を開ける。ここは二階の客用の寝室だと、気づいた。

「このベッド、大きいわ」

「……あのまま床に寝せるわけにはいかないし、あの部屋は、しばらく使わない方が良さそうと思うてね」

相変わらず結城の声はひそひそと床を這う。まるでお通夜の話し声みたいだ。お通夜。日本でそれに出たのは、いつだっただろう。

「ずいぶん眠ったみたい」

頭痛は治まっていた。腰の痛みも今は感じない。

「二日ばかり、注射で眠ってもらったよ。そのほうが回復が早い」

真弓は左手の腕に張られた小さな四角い絆創膏に目をやる。そう言えば、ねむりがぐすりだよと、遠くから結城の声がしていた。シーツに包まれ抱えられながら階段を上った。結城の荒い息が真弓の肩を生温かく湿らせていた。切れ切れの記憶が脳裏に浮かぶ。

「注射をされたなんて、久しぶりだわ」

「細いが、柔らかい血管だったよ。まだ、若い」

渡されたカップの中には、黄金色の透明な液体がとろりと揺れている。

「なんのスープ？」

「スッポンだよ。日本から空を飛んできた」

真弓はこわごわ唇を寄せる。一口飲むと、食道から胃へ熱い塊がゆつくりと下降していく。柔らかな、日本の味がする。

「温まるわ」

結城は頷いた。

「川本の奥さんから送ってきてね。意外といけるから、最近ほネットでも取り寄せて飲んでる。朝はこれで十分だ」

「高そうなスープだね」

「君の稼ぎでは、なんてことないよ。もっとも、これからはお金は無駄に使えない。貧血がひどくて倒れたから、もう君が仕事を続けるのは無理だと客たちに連絡した。もちろん大野にも伝えた。見舞いたいと言われたが、断った。化粧しない顔を見せるわけにはいかないと、言っているからとね」

それほどの化粧をしたことはない。真弓は素肌の美しさを褒める男たちの言葉を養分にしてきた。結城はどこかで仕入れた娼婦の話を持ち出したのだろう。「椿姫」になせりふがあったかもしれない。「よかった。あなたがいてくれて」

「ありがとう。いろいろと」  
「礼には及ばない」  
「そうね……お腹が空いたみたい、若いから」  
待っていたように、結城は立ち上がった。  
「スープがある。温めてくるよ」  
結城はキッチンへ向かった。いったいどんなスープだろう。結城は料理が上手くはない。きつと、出来合いの物を温めてくるに違いない。

真弓は上体を起こし、足を床におろした。少しふらつくが、両足を少しずつ動かしてトイレへ向かった。ショーツを脱ごうとして、これは結城が穿かせたのだと気づいた。何かが便器に落ちた。生理用ナプキンだ。赤く染まっている。

真弓の唇から笑い声が漏れた。あの結城が、クローゼットからショーツとナプキンを取り出して、真弓に穿かせたのだ。どんなに慌てただろう。生理用のショーツなど知らない結城の手で選ばれた、レースの縁取りの薄い紫色のショーツには、ナプキンからしみ出た血の痕がついていた。

軽い痛みを連れて、濃い尿が便器に流れた。

わたしの体は、まだちゃんと働いている。

頭痛とめまいで、しばらくそのまま座っていた。

ようやくベッドへ戻ると、湯気の立つスープの入ったマグカップを両手で持ち、結城がやって来た。

「まだ、これからさ。回復にはしばらくかかるから、ゆっくり休むといい。私は隣の和室を使わせてもらおうよ。もう荷物も運び込んだし。ついでに、居間のドアの鍵も直した。庭に出るドアの鍵が壊れていたからね」

ああ。あの男は庭から来たのか。あの、西に向かってなだれこむ谷から。どうりで土臭かった。山の中をうろつく猟犬のような臭いがした。きつと泥に塗れた足跡もそこいらじゅうにあっただろう。結城はすべてを綺麗に片付けてくれたのだ。一人で、慣れない作業に悲鳴を上げる体を構わずに。

真弓は横になった。ダブルベッドは広すぎて海原に浮かぶ漂流者みたいだ。

「あなたも疲れているわ。ここで、一緒に休んだらどう？」

「ああ。そうしたいが、これから仕事だ。君の薬が切れる時間だから、目覚めるのを待っていた。十時に患者さんの予約が入っている」

結城は真弓の額に軽くキスをして部屋から出て行き、真弓は瞼を閉じた。

再び目覚めたとき、窓からは金色の陽射しが長く差し込んでいた。浅い眠りだと感じていたが、ずいぶん時間が経っていた。夢を見ていた。金色の熊のような白人の男にピストルを向けていた。男は尖った黄色い歯をむき出して薄笑いをしていた。そんなおもちゃのピストルでなにがで

透や真弓のような存在はあり、これからもなくなるならないだろう。

誰も悪くない。真弓が娼婦であることも。だれも、だれも、悪くない。

真弓はピストルの銃口をこめかみに当てた。人差し指に力を込める。微かな音がした。虚しい音は石壁を震わせる間もなく消えた。結城はどうして、本物のピストルを用意してくれなかったのだろうか。真弓はベッドの端に座り、音もなく這い上がる闇に全身で溶けていった。

頭痛と顔の青い痣はいつまでも消えず、体調のすぐれない日が続いた。生理も途絶えた。荒々しい白人の男の行為に痛めつけられた体は、簡単に元には戻りそうもなかった。結城に勧められ、顔の痣を化粧で隠し、重い体を引きずるようにして、婦人科に行った。

日本と同じ白衣姿の頭の薄い医師は、ミセス……と話しかけ、ミスです、と答えると、そう、と頷きながら続けた。

「妊娠です」

明るい口ぶりで、宣言するように医師は言い、軽く首をかしげながら続けた。

「あなたの胎内に新しい命が芽生えました。くれぐれも体を大切にしてください。ハズバンド……ではない、ペビーの父親にも、手荒なことはしないように伝えてください。」

きる。體えた生臭い息が真弓の顔に吹きつけて思わず激しく首を振り、目が覚めた。

真弓はベッドサイドの机に手を伸ばし、一番下の引き出しを開ける。奥を手で探ると、冷たい感触があった。銀色のピストルが、真弓の手の中でひっそりと光った。

このピストルが本物だったら、あの男の胸に弾を打ち込んで、オカマ軍隊ではないことを思い知らせてやれたのに。真弓の唇から笑い声が漏れ、石の壁に弾かれた。

透。あなたは何もしてくれなかった。助けてはくれなかった。透が消えてからこれまで、わたしがこの街で生きてきたのは無駄だったのだろうか。それを知らせるために、あの野蛮な男はやってきたのだろうか。さっさと日本に帰れ。ここはお前のいるところではない。そう知らせるためにやって来たのだろうか。

この世の中では、誰も戦争に無関係では生きられない。日本では分からなかったこの真実は、この国に来て教えられた。フォークランド紛争、イラン・イラク戦争、アフガニスタン。この街では戦争はずいぶん身近に感じられた。リュックを背負い迷彩服姿で週末に帰宅する近所の若者の姿は、ありふれた日常だった。人間は歴史の始まりから、争いを繰り返してきた。欲望や執着や愛情や無数の正義。それよりもっと根源的な、無自覚の暴力。人は正しい行為と信じて、人殺しをする。人を傷付ける。いつの時代も

陰部に裂傷の痕がある。これからはそのようなことは禁物ですよ。優しく行為をするようにしなければ、胎児にも母体にも危険です……。おめでどう」

混乱したまま、真弓はクリニックを出た。どのようにして地下鉄に乗り、どの道を通って帰り着いたのか、濃い霧の中を歩いたように曖昧なまま、家のドアを開け階段を上がり、ベッドに倒れ込んだ。

翌朝、結城はようやく代わりの医師の当てができた、勇んで日本へ旅立った。

結城がいよいよ一週間、霧から抜け出せないままに真弓は透の骨に語りかけ、マーサの足音を聞いていた。自分の身に何が起こったのか。どのように受け止めれば良いのか。いや、そもそも、わたしはこのまま生きていて良いのか。動きの緩慢な頭に、同じ問いが浮かんで消えていった。

結城が戻ってきた。表情が明るい。首尾は上々だったようだ。

「来春、新しい人が来ると決まった。独身の女医さんだ。優秀で、英語もよく出来る。子供の頃にバレエを習っていたらしくて、ロイヤルバレエ団の公演を見るのが楽しみと云っていた」

弾むように繰り出す結城の声を聞きながら、真弓は用意しておいたシャンパンを開けた。

「よかったわね。これでようやく治療に専念できるわ。本

当は、すぐにでも仕事を辞めて療養できればいいのだけれど」

「それほど病状ではないよ。これがなければ、すぐ治る。その代わりに心が病んでいく。精神の健康のために、乾杯だ」

結城は金色の泡が弾けるグラスをあげた。真弓もグラスを合わせる。二人は無言で、ほとんど同時に飲み干した。

「その療養だけどもね、この機会に日本に帰って治療を受けたらいいと、周りから勧められたよ。瀬戸内海の島に精神病院があつて、そこで医者を探しているらしい。還暦を過ぎた院長が一人いて、後は若い医者が交代で来ているが、もう一人常勤の医者を欲しがっているから、どうかと言われた。気候も穏やかだし、病状の安定した患者さんばかりだから、楽な仕事らしい。淡路島から船で二十分ほどのところにある、人口三千人ばかりの大きな島でね、ちゃんとした内科の診療所もあるから、そこで治療も受けられるし。美味い魚がただ同然で食えるそうだ」

瀬戸内海。淡路島。真弓の前に、不意に日本が現れた。思い出の霧の彼方から、遠い遠い日本が近づいてくる。話し続ける結城の顔に、真弓の目は吸い寄せられる。

「淡路島出身の先輩がいてね、親の後を継いでいるが、この院長と同じ医師会だそうで、適当な人はいないかと相談されたらしい。良い人だったよ」

「……余所者ではなく、私が娼婦だったからよ。日本人だけの娼婦だったから」

「その男は、どこでそれを知ったんだ？ ごく限られた日本人しか知らないことだろう。か弱い日本人の女が一人で暮らしている、それが何よりの原因だよ。いやでも目を引く」

「娼婦だと言われたの。日本人ばかり相手にしている娼婦だと、はっきりと言われたわ。どこかで会った男らしかった。あの訛りの強い話し方には覚えがあつたもの。わたしにはきつと、それと思わせる何かがあるのね。長年やっていて、きつと、色のついた空気のような、特別なおいのようなものがあるのよ。あの男は、それに呼び寄せられたの」

「そんなものは、理由にならない。クズ男の肩をもつてどうする」

そうね。真弓は小さく頷いてグラスを回す。泡が踊る。「ともかく、よく考えてみようじゃないか。潮時だと思わないか？ その院長に会ったときに、独身ですかと聞かれた。お相手はいないのですかとね。独り者だと腰が落ち着かなくて、すぐに辞められても困ると思っっているようだ。それでなくても外国の小さなクリニックで長年働いていた医者なんか、得体が知れないと思われている。大きな病院に研究で行ったのならともかくね。だから、相手はいると

胸の高鳴りを抑えて、真弓は言った。「もう、会つて来たの」

「ああ。淡路島の端っこに素敵なりゾートホテルがあるんだ。そこに先輩と招待されてね。ホテルは海を見渡せる高台に建っていて、その島が見える。ホテルの足元にある町から定期船が出ているんだ。イタリア料理も日本料理も一流の味だった。ゴルフ場が併設されているし、プールやテニスコートもある。関西に住んでいる金持ちがお客らしい。家族連れの外人もいた」

なるほど。東京の下町育ちで、美味しいレストランと居心地の良いバーがなければ生きていけない人なのに、島暮らしなんてと驚いた真弓は、すつと肩の力が抜けた。

「ずいぶん急な話ね。これからは、あなたとここで暮らすと思つていたのに。なんだか、混乱するわ。日本に戻るの……もう決めたの？」

「いや、返事は今年中にすればいい。君とも相談したいし、すぐには決められないよ。それで考えたんだが、君も日本に帰らないか」

結城は口調を改めた。

「このまま、この家で暮らすのはよくないよ。私たちは所詮、余所者なんだ。この間のこともそれが原因だと思つ」

結城は結論を下すように言った。テーブルに置いたグラスの底から、金色の小さな泡が上昇しては消えていく。

答えた。近々結婚する人がいるとね。そうしたら、一戸建ての家を用意してくれるらしい」

ずいぶんと好条件の話だ。それほど、日本は医者不足なのだろうか。

「……わたしたち、結婚するの？」

「一緒に暮らすだろう、ずっと。いまさら離れるなんてできない。だったら、籍を入れた方がずっと楽に暮らせる。日本はそういう国じゃないか。一緒に帰ろう、良い機会だ」

翌日から結城は仕事に出た。急に取った休暇で、仕事が出積しているという。真弓は、気負うように急ぎ足で出かける結城を、毎朝、玄関先で見送った。夜は誰かとの会食が入り、遅い帰宅が続いた。お酒を控え、薬を飲んで、病状は何とか悪くならずに済んでいる。この街での九年間の仕事に始末をつけようとする気力が、何よりも結城の体力を持ちこたえさせているようだったが、意外に勤勉な姿を見せられて、真弓は軽い衝撃を受けていた。この街にやつて来た日本のエリートたちと同じように、結城もまた、仕事に全存在を賭ける男の一人なのだと思付かされた。真弓は前のめりの結城の毎日を、傍観者のように見ていた。

玄関先の木蓮の枝に残る分厚い葉は、落ちないままに秋を終ろうとしている。枯れようとして枯れないその未練がましい様子は、ぐずぐずとこの街に住み続ける自分の姿を



見せられているようで、真弓を落ち着かない気分させた。

この街を去るときが来たのだろうか。真弓はこの思いにようやく辿り着く。しかし、お腹の子供はどうしよう。死者ばかりを思い、やがて結城も真弓もその列に加わると思い定めて生きてきた、その思い込みを愚か者と笑うように、真弓は身ごもってしまった。いたずらな神の気まぐれのように舞い降りた新しい命は、真弓の子宮の中で力強く脈打ち、日毎に成長している。その感覚は常に真弓を刺激し、覚醒させる。初めて経験する感覚は、けれど決して不快ではなかった。体の奥からじわりと温かいものが湧き上がるような、満ち足りた思いを、真弓は戸惑いと期待を交錯させながら受け入れていた。

子供のことを言い出だせないままに、次の診察日がやってきた。

「元気に育っていますよ。きわめて順調です」

歌うような口調の医師は、髪を薄い頭を振りながら真弓に微笑んだ。妊娠十五週目に入っていた。

診察で疲れた体をバスタブに沈める。きょうのマーサは静かだ。どうやらマーサの訪れには気温が関係しているらしい。冬の方がお湯を通すときの圧力は強まると思うが、そのような常識を撥ね退けるように夏のマーサは威勢がよく、冬の訪れは間遠で穏やかだ。年寄りのマーサは寒がり、冬に暖炉の前から動きたくないのよ。今朝も、出かけた。

そして、この子の父親である金髪の男のことも。忘れることなんかできない。わたしの体に刻み付けられた記憶は、決して消えない。

けれど今のわたしには、日々育っているこの子の存在が何よりも重い。

もしかしたら、この子は透の生まれかわりなのかも知れない。透が、あの白人の男を通してあの世から送り込んだ命かも知れない。一度この思いが浮かぶと、強い磁力に引きつけられるように、真弓はそれに捉えられた。透の子供を産む。全身が震えた。この子を生かさなければ。殺してはいけない。この世に生み出さなければ。日々強くなる思いを、自分の胸に収めておくのはもう限界だった。

バスタブに背を預けて目を閉じた。壁の奥から、かすかにマーサの足音がする。やっと来た。会いたかったマーサ。どうしようマーサ。わたしはどうしたらいい、マーサ？

……さあてね。困ったねえ。本当に産むの？ どこの馬の骨ともわからない、乱暴者の白人の子供を。どうしてさつさと墮ろしてしまわない。日本は中絶天国なんだろう。神様のいない自由の国。闇から闇へ葬られる、人の形になるかならないかの、芽生えたばかりの命。あんたのように不幸な妊娠ばかりではなく、愛し合った恋人たちのちよつとした過ち、もう子供はいらないと、平然と言いつつ普通の主婦、みなさつさと身軽になつていく、恐れを知らない欲

る結城と冗談を言い合つた。

暖房が入る冬の室内は薄着で十分なくらい、いつもスチームが動いている。それがお湯の配管にも影響するのだろうか。結城は言つた。ともあれ、風呂のときに静かなのはありがたい、と。

少し丸みを帯びてきた腹部が、お湯の中で青白く盛り上がる。体の変化は、間もなく隠せなくなるだろう。

「そろそろ結論を出して欲しい。もう期限が近づいている」昨夜遅く帰宅した結城は、久しぶりに酔いを見せ、揺れる体を真弓に預けながら言つた。

「夫婦になるのをなぜためらう。だったら、なぜ一緒に住んでいる。夫婦同然に暮らしている。きみが娼婦だったことも男に襲われたことも、日本に帰れば誰も知らない。日本の片隅の小さな島では、きみの外国での暮らしなんか、全然関係ない。みんな消えてしまふ。何を迷っているんだ。透も、何もかも、みんな忘れてしまへ」

強いスコッチの香りを全身から発散して、真弓の体温で温もつたベッドへ雪崩れ込むように伸びた。自分の服を脱いで下着になると真弓の体を撫でさすり、少し太つたなあと、寝言のように呟く。仕事をやめたら食欲が出てきたの。真弓の咄嗟の答えを聞く間もなく、すぐに寝息をたてた。

忘れることはできない。透のことも。娼婦だったことも。

望の渦巻く国。その国で育つたあんたが、そんな子供を始末しないなんて、わからないねえ。金髪と白い肌の子供を、日本の小さな島でどうやって育てる？ 不幸になるに決まっているじゃないか。いじめの格好の的さ。どんなに大人しくしても、どんなに馴染もうとしても目立つばかり。田舎者は意地悪だよ。結城と結婚するって？ 父親にさせるのかい？ あんな男の子供の。いくらお人好しでも、引き受けるものか。大酒飲みの男なんか信じてはいけない。お酒は人を狂わせる。今は、日本に帰りたくて優しくしているだけさ。奥さんがいたほうが体裁が良いもの。猫を被っているのさ。あんたを連れ帰って、都合良く使うつもりだよ。あんたのお役目はお手伝いと看護婦。元娼婦だもの、どうにでも使えるさ。引き受けるものか、あいの子の父親なんて……。

マーサの声は浴室内に轟き渡り、真弓の全身を打ち叩く。うるさい、マーサ。あなたはわたしの味方じゃなかったの？

本当にマーサ？ 別人みたい。この子を殺せというの？ 透との三年間の暮らしでも、結城と過ごしたベニスの旅でも出来なかつた子供が、授かつたのよ。それを無くせと言うの？ 父親なんてどうでもいいわ。もう死人はたくさん。この子を殺したら、わたしは二度と母親にはなれない！

真弓は揺れる湯を掻き分け、思いきり蛇口を閉じた。マーサに相談してはいけないかつた。マーサは死者の国の

人だもの。自分の仲間に取り入れようとはかりする。もうあなたには頼らない。

結城に話さなければ。

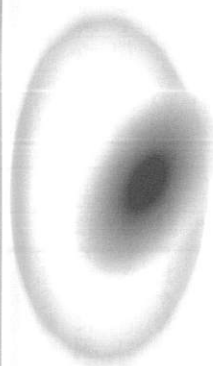
この子を産みたい。それでよければ、一緒に帰るわ。看護婦でもお手伝いでもなんでもする。あなたの妻にならなくてもいい。わたしは母親になるの。子供の父親は、はじめからいないもの。わたしだけがこの子の親になる。それでよければ三人一緒に、その島で暮らしましょう。

週末の休日が良いと真弓は思う。ようやく訪れた休息の朝に、十分に休んだ結城が床を離れる昼近く、ランチの前に話そう。

「これでいいわね」

真弓はタオルで丁寧拭いたお腹に向かい、声をかけた。マーサの去った部屋に、真弓の声が反響した。

〔南風〕29号より転載



# 南風

福岡県

書きたいから書く

〔南風〕近況——三十号発刊

文芸思潮二〇一〇年夏号「同人雑誌紹介」欄に「南風」紹介記事が掲載されて二年が経つ。この二年間での変化と云えば、編集と事務局の交替がある。引き継ぎもスムーズに進み、「南風」年二回発行を、変わらずに続けている。新しい編集は二十九号にはじまり、二〇一一年秋に三十号記念号を発刊した。特別な企画はなかったが、創刊号から在籍する発行人松本文世に「三十号発刊を迎えて」の記事を依頼し、合わせて創刊号より三十号までの目次一覧を掲出した。頁数にしてみると十枚ばかりに凝縮された「南風」の歴史だが、振り返ってみれば今日を築いてくれた諸氏への感謝の思いを深くする作業だった。

当地、福岡市には、毎年の文学活動の功績に対して贈られる「福岡市文学賞」というのがあり、二〇一〇年には「南

## 自費出版承ります

### 文芸思潮 出版部

あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイスして、最良の本を作ります。

### 心に残る本を

200P 500部

ハードカバー

80万円上製本 並製 65万円

詩集並製 100P 50万円ご相談に応じます

文芸思潮出版部へお電話ください。

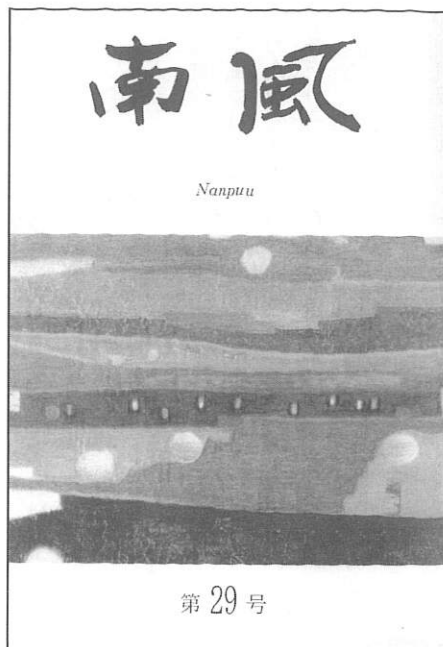
TEL03-5706-7848 五十嵐・里見まで



紺野夏子

こんの なつこ

1949 佐賀市生まれ  
九州大学医学部附属看護学校卒業  
福岡市在住  
南風の会同人



# 南風

Nanpu

第29号

風」二十七号「雨あがり」と二十八号「夕暮れのころ」の渡邊弘子が、継続的に発表する作品の質の高さを評価されてこれに受賞した。福岡市文学賞は第一回は白石一郎、二回目夏樹静子と続き、以後、杉本章子、片山恭一らを輩出した文学賞であるが、渡邊弘子に先立ち、年代順に記せば、松本文世、和田信子、紺野夏子も同文学賞を受賞している。「南風」二十年のこれまでに他の賞などの受賞歴や各紙からの評価などもあったが、作品は書きたいから書くのであって褒められたくて書くのではない、などと多少窮屈な青臭さもあり、ごく最近まではその手のことには後記でもふれず、読者へのご報告もしてこなかった。

しかし、考えてみるまでもなく、作品は読んでもらうために発刊するのであり、それを選者や評者が貴重な時間をさいて読み、取り上げて下さるのだから、この「南風」の姿勢はいかがなものであったかと考えるようになった。それで三十一号の後記には、三十号紺野夏子の「死なない蜻」が複数紙で評価を受けたこと、福島の原発事故を題材とした三十号二月田笙子の「廃墟の月」を西日本新聞紙上で批評してもらったことなどを報告した。三十一号では渡邊弘子「道祖さん」が読売新聞、西日本新聞両紙に取り上げられている。渡邊弘子は昨年度北九州文学賞で「真夜中のシャボン玉」に佳作入賞も果たしている。北九州文学賞は居住地を問わずに応募出来る広域レベルの賞なので、佳作といえども快挙であった。

今回、二十九号紺野夏子「マーサの足音」が文芸思潮全国同人雑誌優秀賞に選ばれたことが一番直近のご報告となることを素直に喜ばしいと思う。優秀賞は「まほろば賞」の候補作ともなる。二〇一〇年に二十七号和田信子「ミッドナイトコール」が最優秀賞の「まほろば賞」受賞の栄をいただいたのはまだ記憶に新しい。

ところで、「南風」が長年例会に利用してきた貸会議室は、福岡城を囲む掘端のビルの六階にあった。春の桜、夏の睡蓮、秋の紅葉、掘端の景色はいつも私たちの目を楽しませてくれた。厳しい作品合評の帰り道など古い石垣と周

辺の緑に慰められた同人も多いことだろう。今は千葉県在住の松本文世は掘端の柳の新芽をことに愛した。

二〇一二年六月、この会場が使えなくなるという通知が事務局に届いた。同人誌にとって会場確保はかなり現実的な難問の一つである。急ぎ福岡市の各施設をあたり、これまでの会場の近くの会館に申し込み登録をすませてきた。

登録の際、構成メンバーの年齢を問われた。六十五歳以上が何人かいれば賃料が減免と言われ、全員七十歳以上と答えたが、ひとりだけ六十二歳がいた。まさに高齢者団体である。しかし、最近の東京新聞紙上に「新人作家かなり晩成」の見出し記事もあった。その中で文芸評論家の勝又浩さんは「同人誌を読むと中高年層の書き手が増えていることが分かる。どんな世界でも裾野が広がれば新たな才能が現れる」と書いている。同じく同記事中、批評家市川真人さんは、「新人賞という枠でも年齢に関係なく作品を評価しようという動きが進んだ」と指摘されている。励まされる昨今である。

「南風」は二〇一二年六月現在同人数九名である。これだけの人数で号を重ねていくには互いに支え合っていかなければ得ない。少数で心細いこともあるが、作品が印刷所へ渡る前に全員で互いの作品に目を通し、誤字脱字等の見直しができるのは逆にこの人数だから出来るメリットと言えるかもしれない。

新しい会場の規約に、お酒と煙草は厳禁の一項があり念を押された。その点は全く問題ないですと答えた。場所をかえての発行ごとの乾杯には必ず何人かの、ノンアルコール！の声上がる。会員の半数がアルコール一滴も駄目……というのは、いささか行儀が良すぎて、さびしくないこともない。目下三十二号へ向かっての作品が揃いつつある。

（「南風」編集人／和田信子）



南風の会

〒814・0014

福岡市早良区弥生2・2・8

二宮義子方

☎092・846・0736



合評会風景